

---

# グルメイ

李音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

グルメイ

### 【Nコード】

N6004W

### 【作者名】

李音

### 【あらすじ】

地元では有名な女子高生フードファイター、紅野林檎は、突如として現れた深山鵜に菓子パン早食い勝負を挑まれる。普段は目立たず大人しい鵜だったが、その実力は凄まじいものだった。それを切欠にして、林檎はプロのフードファイターも出るという、闘食杯の出場を決意する。森宮胡桃、春園小桃の二人を新たに仲間に加え、マネージャーには胡桃の幼馴染の真名上刃を迎えて、少女達は闘食杯の優勝を目指す！

(甘辛小説ギルドG A I Aにも投稿)

## 第一話 あなたが欲しい……

（しゅん）

紅野林檎は専用に使っている紅い箸を懷から取り出し、それを振り上げた。目の前には、赤髪をツインテールにした小柄な制服姿の少女には似つかわしくない、巨大な丼に具も麺もてんこ盛りのラーメンがあった。それから立ち上る湯気で少女の顔が霞んで見える。それもラーメンの巨大さを物語っていた。

「量を増やしてきたな」

「制限時間は三〇分だ」

「いつでもいいよ」

「スタート！」

少女は高く掲げていた箸を丼の中に突き刺し、ものすごい勢いでラーメンを啜り始めた。その様子を見て店主は薄笑いを浮かべた。

前回の三人前ラーメンはあっさり食われたが、今回の五人前は三〇分では食いきれまい。

そう思った店主の思惑から、状況はどんどん外れていく。少女のラーメンを食べる勢いは衰えを知らず、巨大な丼の中身は見る間に減っていった。少女がスープまで飲み干し、最後に残った鳴門を口に放り込んだ時には、店主の顔は真っ青だった。

「ご馳走様つと、時間は…二二分か。まあまあだな」

「うぐう、ぬうう……」

「賞金ちょうだい」

「おのれ、次はこうは行かんぞ……」

「何度やっても同じだと思うよ」

親父は極限の悔しさを渋面に浮かべつつ、金一封を少女に渡した。  
「やったね！」

少女は中に入っている五千円を確認してから、足取り軽く店の入り口の木戸を開けると振り返って言った。

「親父さん、挑戦なら何時でも受けてあげるよ。じゃあ、またね！」

林檎は外に飛び出し、走りながら腕時計を見てもうすぐ夕方の五時になるのを確認した。

「うわ、やばい！？ バイトに遅れる、また怒られる！」

少女は学校帰りの中高生の間を避けつつ、バイト先にコンビニに向かつて商店街を駆け抜けていった。

昼休みを知らせるチャイムが鳴った。林檎が通っているのは宇都宮市内にある明凛館めいりんかん高校で、生徒数五千人以上を有する全国でも有数のマンモス高である。男子生徒は黒い学欄で、女子生徒は青いブレザーに紺と白のチェックスカート、白いブラウスの胸元には可愛らしいループタイを付ける。ループタイには様々な色があり、好きなものを選ぶ事が出来た。ちなみに林檎は赤いループタイを愛用している。

昼になり林檎はバッグを開けてその中を見ながら、絶望の闇へと落ちていくところだった。

「弁当がなーーいつ!？」

林檎は頭を抱えて悶えるように叫んだ。

「うっ、昼を抜くなんて考えられないし、仕方ない、学食にするか……」

林檎は無駄金を使うやるせなさからため息を吐き、さらに紅野家の食べ物に対する厳しい掟を思い出して言った。

「はあ、夕飯は玄関に忘れた弁当で確定だな……」

林檎が席を立ったその時、いきなり他のクラスの生徒が教室に入ってきて、まっすぐ林檎の方に向かってきた。黒髪をボブにした林檎よりも小柄な少女で、他の生徒とは明らかに雰囲気が違う。ループタイは黒で、ブレザーの襟に金色のバッチが輝いていた。このバッチは特進クラスの生徒である証だった。

周りの生徒たちの注目を一身に集める少女は林檎の前まで来て言った。

「紅野さん……」

「特進クラスのエリートが、わたしに何の用だ？」

林檎は特進クラスが生理的に嫌いだったので、かなりぶっきらぼうな調子で言った。黒髪の少女は気にした様子もなく静かに言葉を紡いだ。

「あなたが欲しい……」

「え？」

一瞬、辺りの空気が凍りつく。林檎は急に絶望を投げつけられたような顔になり、後ろの椅子や机を蹴散らしながら後退した。

「ちよちよちよ、ちよーっと待った！？ わたしにはそんな趣味はない！！ 他を当たてくれ！！」

「あなたは勘違いをしているわ。わたしが欲しいのは、フードファイターの紅野林檎よ」

「どうということだ？」

「わたしと一緒に闘食杯に出て欲しいの」

「なるほど、そういう事か。悪いけど、あたしは興味ないね」

「なら、わたしと闘食で勝負しなさい」

「本気？ あたしが誰だか知らないのか？」

「知っているわ。あなたはこの辺りでは有名なフードファイターだもの」

「それを知ってて挑戦してくるってことは、よっぱどの馬鹿か、よっぱど自信があるか」

林檎は目の前の少女の黒い瞳を見つめた。静かに佇む少女の中には、熱い闘志が漲っていた。

「…勝負の方法は？」

「パン勝負。十五分の間により多くのパンを食べた方の勝ちよ。わたしが勝ったら、一緒に闘食杯に出てもらうわ」

「面白い、その勝負受けた」

事の成り行きを見守っていた周りの生徒達は、思わぬ展開に興をそそられ、積極的に勝負の準備をしてくれた。

やがて三つの机が並べられ、右端には林檎、左端には謎の少女が

座り、真ん中の机に様々な種類の菓子パンが山と積まれ、林檎と少女の席には五百ミリのミネラルウォーターのペットボトルが置かれた。

この時、絵に書いたような美少年と美少女が、騒ぎの起こっている普通科一年七組の教室の前を通りかかっていた。学ラン姿の少年の方は大人しそうな感じで、髪は黒く背は中背と言った所、少女はパールのように白く滑らかな肌をしていて、ブロンドの長髪にソージュをかけ、頭には翡翠製の葉っぱのヘアピンを付けていて、瞳は青色だった。ループタイは若草色で、ブラウスの下には豊かな胸の膨らみがある。そして、この二人の制服の襟には銀色のバッチが付いていた。これは特進科の次に優秀な進学科の証だ。

「まあ、何の騒ぎでしょう？ 皆さんで集まってティーパーティーでもしているのでしょうか？」

「さすがにそれは無いと思うよ……」

「そうですね、覗いてみればいいのですわ、そうしましょう、そうしましょう」

そう言いつつ教室に入っていく少女の後を、少年は苦笑いしながら追った。

「なんだか面白そうな事になってるね」

「本当、とっても美味しそうなチョココロネですわね。頬ずりしたいくらいなのですわ」

「は？」

少年が幼馴染の少女の目線を追うと、それがパンの山に注がれている事がはつきりと分かった。

「胡桃ちゃん！？ 違うでしょ！？ 見るのそこじゃないでしょ！

？」

「刃様、どうかいたしまして？」

「いや、あの二人を見てなんとも思わないのかい？」

「二人で並んでパンを食べるなんて、きっと仲がおよろしいのですわ」

「あれはどう見たって勝負だよ……」

その勝負は今まさに始まるうとしていた。

「勝負をする前に名乗っておくわ。深山<sup>みやまつぐみ</sup>鵜よ」

「じゃあこっちも、あたしは紅野林檎、さすらいの食賞<sup>しょじょうしきかせ</sup>金稼ぎさ」

「始めましょう」

側にいた男子生徒の一人が、ストップウォッチを持って言った。

「制限時間は一五分、菓子パンの袋をより多く積み上げた方の勝ちだよ」

今や教室を埋め尽くすくらいに集まった生徒たちの間に緊張が走る。

「始め！」

林檎が素早くカレーパンを手に取り、封を切ってかぶりついた。

二口、三口と見ていて気持ちのよくなるような食べっぷりに教室が沸いた。同時に疑うような視線が林檎の隣に注がれる。林檎が気になって挑戦者の方を見ると、驚いて目を見張った。

こいつ、なにやってんの！？

鵜は両手を胸の前で合わせて深呼吸を繰り返していた。パンを手取る様子はない。

なんだ、口だけって事かい、がっかりだね。

林檎は食べ終わった一つ目のパンの袋を机の上に叩きつけた。

鵜はたっぷり三分も深呼吸をしていた。その間に林檎は四つ目のパンに取り掛かっていた。鵜に対するギャラリーの期待が萎んでゆくのが肌でも分かる。ただのはったりだったかと、誰もが息を吐いたその時、鵜は手近にあったクリームパンを一瞬で手にとって、何時動いたのか分からないような速さで封を切ってパンに口をつけていた。一口に林檎のような豪快さはないが、マシンガンを思わせるような速さで一つ目のパンを食べきった。急に沸きあがる生徒達、そして驚愕する林檎、つぐみの右手が円を描き、円の頂点で菓子パンの袋を手放し、元に戻る軌道の途中で菓子パンを掴み素早く封を切る。鵜が二つ目のパンに口をつけたとき、ひらひらと宙を舞って

いた菓子パンの袋が机の上に落ちた。洗練されたまったく無駄のない動きに生徒達は魅入った。

早い！！？ こいつ、何者だ！！？

鵜は二つ目のメロンパンをあつという間に半分食べた。その時に林檎は四つ目の菓子パンの袋を叩きつけ、五つ目に取り掛かる。

やばい、このままじゃ追いつかれる！

五つ目のパンを食べている途中で、その焦りが出た。

「うぐっ！？」

林檎はパンを喉に詰まらせ、慌てて水を飲み、自分に腹を立てる。

何やってんの！？ こんな事してたら…。

生徒たちの間からまた声が起こる。鵜が三つ目のパンを手にとったところだった。林檎はそれを横目で見て険しい表情をした。

こいつは本物だ。こう言う手合いに焦りは禁物、あたしはあたしのやり方を最後まで貫き通す！！

林檎が五個目のパンを食べ終わるのと鵜が三個目のパンを食べ終わるのは同時だった。それでも林檎はもう隣を気にしなかった。二つのパンの封を開け、交互にかぶりつく。

「おお、こっちは二つ同時だぞ！」

「どっちも頑張れ！」

思わぬ大勝負に生徒達は興奮し、数人の教師が注意を促しに来たが、とても中に入れるような状態ではなかった。

二人の間にあるパンの山がどんどん小さくなっていく。

鵜が菓子パンの袋を放り、新しいパンを素早く手に取り、真剣を振るような鋭さで封を切って一口食べる。それと同時に林檎も新しいパンを一口、その時に時間切れとなった。ギャラリーの視線はゆつくりと宙を泳いでいる菓子パンの袋に釘付けになる。それが鵜の前に積みあがった袋の山の頂点となったとき、鵜はペットボトルの水を飲んだ。周りは多くの生徒でひしめいているのに、勝負の終わりには嘘のように静かになっていて、鵜がペットボトルを机の上に置いた音が、林檎の鼓膜に高く響いた。驚いたことに、勝負が始

まっしてから鵜が水を飲んだのは、これが初めてだった。

同じ学校にこんな奴がいたなんて……。

林檎は自分と鵜の前に小山と成したパンの袋を見比べて冷や汗をかいた。

この勝負、負けたかもしれない……。

ギャラリーの手によって、食べ終わったパンの袋の数が確認された。すると二人の前には、それぞれ同じ九枚の袋があった。それが分かったところで、刃と呼ばれていた美少年が出てきて言った。

「二人の食べたパンの数は同じ、それじゃあ勝敗を分けるのは……」  
刃はそれぞれ一口ずつ食べられたジャムパンとアンパンを見比べた。

「この勝負、君の勝ちだよ。こっちのアンパンの方が、より多く食べられているからね」

刃は林檎に向かって言った。豪快にかぶりつく林檎の一口が明暗を分けたのだった。しかし、林檎はまったく勝った気にはなれなかった。

後五分、勝負の時間が長かったら、あたしは負けていた。

鵜の食べるスピードは圧倒的だった。四個もの差をつけていた林檎を、たったの一二分でぎりぎりまで追い詰めたのだ。闘食における実力は驚異的と言えた。

負けた鵜は、無念そうに大きなため息をついてから立ち上がった。  
「……残念、他を当たるわ」

鵜が歩き出すと、集まっていた生徒達が出口までの道を開ける。

林檎は真摯な面で立ち上がり、その背中に言葉をぶつけた。

「待て！」

鵜が振り返ると、林檎はいかにも面白そうだという三日月のような笑いを浮かべて言った。

「あなたの言う闘食杯ってやつに興味が湧いた。あたしも混ぜてもらうよ」

鵜は林檎の前まで戻ってくると手を差し出した。

「あなたとわたしは、今から戦友よ」

「よろしくな！」

そして二人の少女は固い握手を交わした。

戦友とは言ったものの、鶯にはそんな気など微塵も持てなかった。ただ鶯は、自分をまっすぐな瞳で見つめてくる林檎を疎ましく感じて思っのだった。

わたしは目的を果たしたいだけ、その為にあなたを利用するだけよ……。

鶯の心がほんの少しだけ痛んだ。

## 第二話 ケーキの声が聞こえるのです

「なぬーっ、賞金百万だと!？」

学校帰りに鵜から闘食杯の優勝賞金を聞いた林檎が大声で叫だ。アルテミスロードと呼ばれる大商店街を歩く少女たちに周りに注目が集まる。林檎はそんな視線など気にせずと言った。

「最初に言つてよ。あんな食べ比べしなくても協力したのにさ」

「あなたの实力を知りたかったのよ」

「負けたら元も子もないじゃないか」

「でも貴方はわたしと共にいる。それに…」

「それに何だ？」

「賞金をちらつかせれば食いついて来る事も分かっていたし」

「お前、嫌らしい奴だな…」

「わたしは事実を事実として受け止めているだけよ」

「あーあ、どうせあたしは金の亡者だよ！」

それから二人並んで少し歩くと、林檎が立ち止まって親指で古びた餃子店を指した。

「行こうよ」

鵜は黙って従い二人で店に入った。林檎は席に座るなり言った。

「親父さん、名物超特大餃子ね」

「わたしは焼き餃子三人前」

「わざわざお金を払って食べるのか？ お前だったら超特大餃子いけるだろ。食べきったら賞金三千円だぞ」

「わたしはお金を稼ぐ為に闘食はしないわ」

「それがフードファイターの仕事じゃないか。おかしい奴だな」

それからしばらくして、店の親父が「制限時間二十分だよ」と言いながら、三人前の焼き餃子と、十人前に相当する五個の巨大餃子を出した。林檎は御酢と醤油をたっぷり入れたタレに餃子を付けて食べる。

「さっきの勝負での深呼吸、あれ何なのさ？　ただの深呼吸じゃないよね？」

「あれは、中国拳法の呼吸法よ。体に流れる気を活性化させて、新陳代謝を活発にし、胃腸の消化力を高めたの」

「なんだそりゃ、反則じみてるぞ……」

「元々持っている力を使うのなら問題はないわ」

「じゃあもう一つ、ついでに聞くけど、闘食杯って何なんなの？」

「イーストフードカンパニーが主催する、闘食の王者を決めるトーナメントよ。東日本のフードファイター……そこでは闘食家と呼ばれるけれど、それが集まってくるわ」

「へえ、そいつはすごいな」

「試合は三人でチームを組んで行われるわ」

「という事は、一人足りないな」

「出来ればセコンドとマネージャーも欲しい」

「セコンドって何だ？」

「何かがあった時に交代できる予備の闘食家よ」

「他に当てはあるのか？」

「目星を付けている人が一人いるわ。明日にでも交渉しましょう」

「また闘食でも挑む気？」

「いいえ、貴方とはまったく違ったタイプの人間だから、そういう単純な手は通用しないわ」

「それじゃ、あたしが単純馬鹿みたいに聞こえるじゃないか！」

「そうかもしれないわね」

「そこまではつきり言われると怒る気もなくなる」

はたから見ると、二人の姿は他愛のない話をしている女子高生だが、林檎の存在が周りにいる客の視線を集めていた。

「ご馳走様。親父さん、一三分で食べたよ」

「なっ！？」

店主は言葉を詰まらせ、これ以上ない驚きを顔に表していた。

翌日の放課後、林檎は鵜と連れ立って街へ出た。今二人が向かっているのは、アルテミス通りから少し離れたところにあるケーキバイキングの店だった。

「ケーキバイキングなんて、あんな高いの嫌だよ」

「食へに行くわけではないわ」

「じゃあ何しに行くのさ？」

「リサーチよ」

「何を？」

「三人目の仲間よ」

「そいつ甘党なのか？」

「甘党なんていう言葉では片付けられないわ。人知を越えた存在よ」

「なんだそりゃ!？」

「すぐにわかるわ」

林檎と鵜はメイプルハニーというケーキバイキングの店に入り、

それぞれ注文した。

「紅茶を一杯」

「あたしは水でいい」

店員が注文を聞いて去ると、林檎は辺りを見渡した。

「で、その人知を越えた存在とやらはどこにいるんだ？」

「そろそろ来ると思うわ」

その頃、メイプルハニーに近づく少年と少女があった。

「胡桃ちゃん、本当にケーキバイキングに行くのかい？」

「もちろんですわ。これはわたくしのライフワークですもの」

「胡桃ちゃん、ライフワークの意味分かってないでしょ」

「まあ、失礼ですわね。食べる事はあらゆる人間にとってのライフワークなのですわ」

「それは命を繋ぐ為に食べるって意味で、君の場合は全然違っからね……」

「刃様、着きましたわ」

「ああ、魔の時が訪れる……」

胡桃は待ちきれないと言つように、刃を置いて店の中に入つていった。

「店長さん、ごきげんよう」

「げっ、胡桃ちゃん!？」

店の店長は胡桃の姿を見るなり、店が潰れるくらいの絶望感に顔を青くしてから、恐る恐る聞いた。

「小桃ちゃんは一緒じゃないのかい？」

「小桃さんはピアノのお稽古があるので、今日はわたくしだけなのです」

「は~~~~、よかつた~~~~」

「今度来るときは必ずお誘いしますわ」

「い、いや、無理に誘わなくてもいいんだよ、小桃ちゃんにだって色々と都合があるだろうからね。そうだ、こんな店に誘われるなんて、きつと迷惑に違いないよ。うん、きつとそうだ、ははは……」

店長は引きつった笑いを浮かべてから、後から入ってきた刃に走り寄つて耳元で言つた。

「頼むよ刃君、切りのいいところで胡桃ちゃんを帰らせてくれ。この店の命運は君にかかつている」

「いきなり変なプレッシャーかけないで下さいよ……」

二人がそんな話をしている間に、胡桃は色とりどりのケーキが並んでいるビュッフェの前で手を組んだ。

「みなさん、ご機嫌よう。苺ショートちゃんは今日も素敵な白さですわね。紅い苺のアクセントも美しいですわ。黒くて艶やかなチョコタルトちゃんも綺麗ですわ。え？ そんなに褒められると恥かしいですか？ わたくしは本当の事を言っているだけですのよ」

「また変な独りごと言つてる」

「独り言ではありません。わたくしケーキの声が聞こえるのです」

「く、胡桃ちゃん、あんまり大きい声で言わないでよ」

「まあ、あなたたちを食べずに残して帰る人がいるのですね。本当に酷い人たちがいるのですね。わたくしは貴方たちを見捨てるよう

な事はいたしませんから安心して下さいね」

「駄目だ、完全に自分の世界に入ってる……」

周りの奇異に満ちた視線が刃と胡桃に突き刺さる。胡桃はまったく気にせずにケーキに向かって言葉をかけているが、一緒にいる刃方は圧し掛かってくるような恥辱に懸命に耐えていた。

胡桃ちゃんとは小さい頃から一緒にいて奇特なところには慣れているけれど、これだけは何とかしてほしいなあ……。

一方、林檎は胡桃の衝撃的な行動に啞然としていた。

「た、確かにあれは人知を越えてるな、色んな意味で……」

「一緒にいる彼が無残ね」

「完全に巻添い食ってるな……」

胡桃はそれからしばらくケーキに語りかけ、刃を散々憔悴させた後に、ケーキを山ほど皿に取って席についた。それを見ている店長の顔色は悪かった。

「さあ、頂きましょう!」

驚くのはまだ早かった。胡桃はケーキを食べるのは遅い方だが、そのペースを落とさずに延々と食べ続ける。大きな皿に所狭しと敷き詰められたケーキの群れは消えて、また同じだけの量を取ってきでは食べる。ケーキの一つ一つが小さめとは言え、その食欲は凄まじいものがある。幼馴染で慣れている刃でも、お茶を飲むのも忘れて呆然とするほどだった。

胡桃が二度目に持ってきたケーキ達を食べ終えて席を立ったとき、刃は死にそうな顔をしている店長に気付いて、慌てて自分も立ち上がった。

「胡桃ちゃん、もうこれくらいにしておいた方がいいよ」

「何故そんな事を言うのですか?」

「いやあ、その、そんなにケーキを食べたら太っちゃうよ」

「心配してくれるのは嬉しいですね。でも大丈夫です、わたくし食べても太らない体質ですから」

「とにかく帰ろう。もう十分食べたでしょ」

「駄目ですわ。あそこには、わたくしに食べてもらいたいと言っているお友達が沢山いるのです。まだまだ帰れませんわ」

にこやかに応える胡桃に刃はたじろいだ。その様子を見ながら林檎は終始苦々しい笑いを浮かべていた。

「とんでもない電波だな……」

「電波だろうがパープリンだろうが、実力さえあればいいわ」

「あんた結構酷いこと言うね」

鶯と林檎が話している間も、刃の必死の説得が続いていた。

「ケーキは胡桃ちゃんの友達なんだろう。友達を食べるなんていけないよ」

「あの子達にとっては、食べてもらう事が最大の幸せなのですわ。残されてしまうケーキほど可愛そうな子はいないのです。だからわたくしは、出来るだけ沢山のケーキ達を食べて幸せにしてあげたいのですわ」

妙に説得力のある言葉に刃は撃沈された。

店長さん、僕には胡桃ちゃんを止めるのは無理です。もうお店の事は諦めて下さい……。

刃は今にも倒れてしまいそうな様子の店長に心の中で詫びた。それから胡桃は、店長が泡を吹くくらいにケーキを食べてようやく満足した。

「よくあんなに甘いものばかり食えるな。さすがのあたしも、あれは真似出来ない。けど、あいつはフードファイトには向かないぞ」  
「彼女は長時間、自分のペースを崩さずに食べる事が出来るわ。確かに制限時間内に競い合う闘食には難があるけれど、安定感は抜群よ」

胡桃と刃が店を出て行くと、林檎と鶯はすぐに後を追った。

「森宮胡桃さん」  
もりみやくるみ

鶯は店を出てすぐのところで声をかけた。胡桃は首をかしげて見知らぬ少女二人を見た。

「あなたは？」

「わたしは深山鵜、あなたを誘いに来たの」

「まあ、お茶のお誘いですか？」

「ちがうよ、あたしたちと一緒に闘食杯に出ないかっていう誘いだ」  
「闘食杯？　なんですよそれは？　甘くて美味しいものが食べられるのですか？」

「ええ、いくらでも食べられるわ」

胡桃は柔らに手を合わせて言った。

「それは素晴らしい事ですわ。是非ご一緒させて下さいな」

「決まりね」

「ちよつと胡桃ちゃん！？　そんな訳の分からない事を簡単に受け  
ちや駄目だよ！」

刃が慌てて割り込んでくると、林檎が彼の前にずいっと詰めて来て  
言った。

「うつさい、もやし！」

「も、もやし！？　失礼じゃないか！？」

「あんた男なのになよつちいんだよ！　見てるだけでむかつくん  
だ！」

「何て不条理な……」

「こう見えても刃様はとても男らしいのですわ。ケーキを沢山作っ  
てくれるところなんて特に」

胡桃がうつとりして言うと、刃の表情は何故かこの世の終わりを  
味わっているような恐怖に彩られる。

「どの辺りが男らしいんだよ！？」

「…ケーキね」

突込みを入れている林檎の横で、鵜が目を光らせる。その後で鵜  
は刃の瞳をまっすぐに見つめた。

「あなたは料理をするのね」

「ああ、僕はパティシエを目指しているんだ。大抵のものなら作れ  
るよ」

「あなた、名前は？」

「僕かい？ 僕は真名上刃だよ」

なまがみじん

それから鵜は、悩ましげな輝きを帯びた瞳で刃をじっと見つめた。刃の方は小柄で可愛らしい少女の視線に当てられて胸が高鳴るのを感じていた。その様子を見た胡桃はむすつとして明らかに機嫌を損ねていた。

「真名上君」

「はい！」

「あなたの力が必要なの。一緒に来てくれないかしら」

「僕で役にたてるのなら」

刃が思わず言ってしまうと、林檎が鵜に向かって親指を立て、鵜はそれにブイサインで応える。

「よし！ マネージャーもゲットした！」

「え？ マネージャーって何！？」

「これからよろしくね、真名上君」

「刃様もお仲間になりましたのね。素敵ですわ」

「ちよつとまってよ！ 僕は君たちが何をしようとしているのかまったく理解していない！ そして、胡桃ちゃんも理解してないですよ！？」

「甘いものが食べられれば、細かい事なんてどうでもいいのですわ」

「良くない、全然良くないよ！！」

「うるさい、あんたはもうマネージャー確定なんだから、つべこべ言わずに黙って付いてこい」

「うう、何かものすごく大変な事に巻き込まれた気がする……」

刃は胸に差し迫るような悪い予感に身を震わせる。これから恐ろしい事が待ち受けている気がしてならない。刃は、鵜にまんまと乗せられてしまった自分を恨めしく思うのだった。

ケーキの声が聞こえるのです・・・終わり

### 第三話 ただ美味しそうだと思ったから

「今朝、軒庵楼の親父が挑戦状を叩きつけてきたよ。まったく懲りない親父だ」

放課後に林檎は鵜と一緒に校庭を歩いていた。

「軒庵楼って、ペガサス通りにあるお店ね」

「そうさ、大盛りが売りなんだ。あたしそこで何度も賞金付グルメを制覇してるんだよ」

林檎は「挑戦状」と書き付けられた紙を振って空を泳がせながら言った。

「どんな料理を用意してるか知らないけど、何度やっても結果は同じだ」

「油断はしない方がいいわ。たとえ戦歴の勇将でも、油断があればその首を取られる。それは歴史が証明している事よ」

「例えが大げさだなあ。ま、このあたしに限って、賞金付で負けるなんてありえないよ」

「だといいわね」

東武宇都宮駅を境にして、北側にアルテミス通りが、南側にはペガサス通りと呼ばれる商店街があった。軒庵楼はペガサス通りにあるラーメンショップである。

鵜たちは四人で固まってペガサス通りを歩いていた。辺りには学校帰りの高校生や専門学校生がひしめくほどにいて、通りにある店々は賑わっていた。

「何で僕たちまで一緒に行かなきゃならないのかな？」

「チームなんだから、つべこべ言わずに、あたしを応援しろ」

「わたくしはラーメンよりもケーキの方が好みですわ」

「あんたってもしかして、ケーキだけ食って生きてるんじゃないの？」

「その通りですわ」

「いやいや、それは否定しろよ！」

林檎が胡桃に突っ込んだところで、先頭を歩いていた鵜が立ち止まった。

「着いたわ」

林檎が暖簾をかき分け、勢いよく戸を滑らす。

「親父、来てやったよー！」

店は結構な人数の客で賑わっていて、全員の視線が林檎に集まった。白衣に白い頭巾姿の親父が、カウンターの奥でお玉を林檎に向けた。

「来たか。紅野林檎、今日が貴様の命日となる！」

「言ってくれるじゃないか！」

「命日って、殺しあうわけじゃないんだから……」

林檎と店主の親父が火花を散らしている横で、刃がぼそりと言った。

「馬鹿野郎！ これはあたしと親父の命をかけた戦いなんだ！」

「だから、命は必要ないよね」

林檎は店の中に入り込むと、右手を高く上げて、カウンターを叩いた。

「さあ親父、このあたしをぶっちぎれる料理があるって言うなら、出してみろ！」

「よかるう、すぐに作ってやるから待っている」

そして待つこと十分、林檎の前に巨大ラーメンが現れた。それを見た胡桃と刃は顔を背けるようにして言った。

「スープが真っ赤ですわ」

「なんか、湯気が目に染みるんだけど……」

「……親父め、味を変えてきやがったか」

「ふふふ、名付けて赤炎地獄ラーメンだ！ これが三十分以内に喰えたら、金一万円を進呈してやるう」

「まじで！？ よっしゃ、一万頂き！」

林檎が真っ赤なスープのラーメンを一気にかき込む。次の瞬間、林檎は火を吹くような叫びをあげた。

「か、からー！ーっ！！！」

「うははははっ！ 果たしてそれを食いきる事ができるかな？ 時間内に食べられなければ、三千円頂きますよ、お客さん」

「くうっ、姑息な親父め、負けるかーっ！」

林檎は勢いづいてラーメンをすするが、また火のように熱い吐息を吐く。

「辛い、辛すぎるっ！」

林檎がコップの水をぐいっと飲むと、黙って様子を見ていた鵜が言った。

「そんなに水を飲むなんて、闘食家としては失格よ」

「うるさいよ！ こんな時に冷静に突っ込むな！ あんたにはこのラーメンの色がみえないのか！」

「闘食でも普通の料理が出てくるとは限らないわ。特に闘食杯はチーム戦だから、様々なバリエーションの料理が出てくる。当然、辛いものもあるわ」

「うっ、あたしは辛いのはあんまり得意じゃないんだよ……」

「林檎は辛いものが苦手なのね。早くしないと、もうすぐ十分になるわよ」

「くそ、この勝負絶対に負けらんない！」

とは言うものの、林檎は食べては辛さに喘ぐ悪戦苦闘を余儀なくされた。その時に店の戸が開いて、明凜館高校の女生徒が姿を現した。

「こんにちは」

「へい、いらっしやい！」

入ってきたのは大きな瞳の可愛らしい少女で、ショート黒髪の右の鬘を小さなテールにして、ピンク珊瑚で出来た桃のヘアピンで留めていた。ループタイの色は髪飾りと同じ桃色だった。

「あれ？ 胡桃ちゃん、それに真名上君も、こんな所にいるなんて

珍しい」

「小桃さんではありませんか。奇遇ですわね」

「わたし良くここに来るんだ。何頼んでも大盛りだから」

小桃は胡桃の隣に座って、必死に激辛ラーメンに挑む林檎を覗き込んだ。

「あ、それ美味しそう。わたしにもそれ下さい」

『な、なにーっ!!?』

店の親父と林檎が同時に驚愕した。

「あんた、もしかして目が悪いのか？ 大きさと色を見る！ 何を好きこのんでこんな物を食おうとするんだ!？」

「ただ美味しそうだと思ったから」

「こいつマジだ、マジで言ってる……………」

「小桃ちゃん、本当にいいんだね…………？」

「おじさん、早く作って」

「わかったよ。どうなっても知らないからね」

親父は小桃の希望通りに超大盛り激辛ラーメンを作って出した。

「うふふ、美味しそう」

小桃はいかにも嬉しそうな顔で割り箸を二つに割った。林檎が箸を止めて、それを見ると、他のメンバーも注目する。

「いただきます」

小桃の箸先がラーメンの丼の中に消える。林檎たちの間に妙な緊張が走った。そして小桃が真っ赤なスープの中から麺を掬い上げて口に運んだ。

「うん、美味しい!」

小桃は見ている者たちからは信じがたい感想を口にして、ラーメンを勢い良く食べ始めた。

「マジか!？ この殺人的に辛いラーメンを、平然と…いや旨そうに食ってる。どういう味覚してるんだ?」

「林檎、もう二十分経ってるわ」

「やばい!!--」

林檎は慌ててラーメンを口にしたので、激辛のスープまで一緒に飲んで酷く咽てしまった。林檎は水を飲んで落ち着くと、涙目になった。

「うう、今日は厄日だ……」

「まだ半分もなくなっていないわね。残り八分よ」

「あたしは最後まであきらめない！」

林檎は勝ち目のない敵に挑む手負いの戦士のような気迫で激辛ラーメンに立ち向かう。一方、小桃の方は大きな丼の中身を着実に減らしていった。さらに小桃は麺だけではなく、真っ赤なスープまでレンゲで掬って飲んでいる。それを見ていた親父は激しくうろたえた。激辛ラーメンを食べきったら一万円を進呈する事になっているのだ。これは林檎だけに限った事ではなかった。

そして二十分後。

「ご馳走様でした」

小桃は超大盛り激辛ラーメンをあっさりと食べ終え、鵜はその一部始終を一挙一動も見逃さずに見ていた。

「林檎さん、見事な討ち死にですわ」

「返り討ちだね」

「ぐは……負けた……」

胡桃と刃が言う横で、林檎はカウンターの上に突っ伏して、本当に討ち死にしたように動かなかった。丼の中にはまだまだ麺が残っていた。

親父の方は、財布を開く小桃を冷たい汗をかきながら見ていた。まるでこの世ならざる者を見るような目だ。いきなり現れた新たな脅威のお陰で、親父には勝利の余韻に浸る余裕などなかった。

「おいくらですか？」

「は、八〇〇円になります」

「八〇〇円でいいの？ ちょっと安すぎませんか？」

「いやいや、常連の小桃ちゃんだからおまけだよ。ははは」

「またんかこら……っ！！？」

いきなり死んでいた林檎が立ち上がり、親父を怒鳴りつける。

「どさくさに紛れて金を取ろうとしてんじゃない！ あんたも自分が何の料理を食ったのか、しっかり確認しろよ！」

林檎は小桃の後ろから頭を掴み、メニューのある壁の方を振り向かせた。

「あれだ」

「ふえ？」

小桃の目に『赤炎地獄ラーメン！ 三十分以内に食べきったら金一封』と大きく書いてある文字が見えた。

「へえ、あんなラーメンもあるんだ。今度食べてみよう」

「今あんたが食べたのがそれだよ！ どこまで惚けりゃ気が済むんだ！」

「ちっ、余計な事を……」

「姑息な親父め、さっさと金を出せ！」

「お前は食べ切れなかったんだから、早く三千円払え」

それを聞いた林檎は、鉄砲でも撃たれたかのように胸を押さえ、戦場で討たれた武将のような無念な呻き声を上げながら、カウンタ―に倒れ込む。

「うっ、鵜、お金貸してくれ……」

「持ってないのね。負けた時の事を何も考えていないなんて、そういう驕りが隙を作るのよ。典型的な負けパターンだわ」

林檎は「ぐはっ」と刺されでもしたような声を出し、全身の力をなくした。

「鵜さんの言葉はナイフのように鋭いのですわ」

「完全に止め刺されたね」

すぐ近くでは、小桃が親父の出した金一封を慌てて断っていた。

「いいんです。ラーメンがただになるだけで十分ですから。それじゃ、ごちそうさまでした！」

小桃が小走りで店を出て行くと、鵜は黙って立ち上がり、その後を追いかけた。そしてペガサス通りを出る手前のところで後ろから

声をかる。

「待つて、小桃さん」

「ほえ？ 貴方は胡桃ちゃんと一緒にいた……」

「貴方の力が必要な。わたしと一緒に来て欲しい」

「え？ そんな事言われると、何か照れちゃうな。今まで誰かに頼りにされた事なんてないから。わたしが何の役に立てるの？」

「一緒に、闘食杯に出て欲しいの」

それを聞いた瞬間に、小桃の顔に嫌悪の陰が差した。

「それだけは嫌！ ご飯は美味しく食べるものだもん。食べる事で競い合ったりお金を稼いだり、そんなの間違ってる！」

控えめな小桃が急に強い口調になったので、鶯は驚いて相手の顔を見つめた。それに気付いた小桃は、鶯を傷つけてしまったような気がして焦った。

「ごめんね。これだけは曲げたくないの」

そして、小桃は向こうにあるアルテミス通りの方へと走っていった。後から来た林檎たちが、立ち尽くす鶯を怪訝に見つめる。

「どうしたんだ？ さっきの奴に何か言われたのか？」

その時、すぐ側の電気屋の大型液晶テレビから、声が聞こえてきた。

『女王を相手に挑戦者はどう戦う！ また病院送りにされてしまうのか！？』

急に鶯の表情が鋭くなり、突き刺すような視線でテレビを見つめた。そこに大きく写しだされた美女を見て、鶯は忘れられない高笑い、目の前に倒れている大切な人を呆然と見つめる自分を思い出した。それは鶯の心に深い傷となって残る闇だった。鶯の怒りと悲しみが言葉突き上げる。

「華喰沙耶子、必ず倒す」

林檎たちは、寡黙な鶯が怒りに燃える姿を、目を丸くして見ていた。

ただ美味しそудだと思つたから…終わり

## 第四話 あなたはどちらを選ぶの

鵜は学校と交渉し、チームの拠点として家庭科室を借りていた。

そこで鵜は胡桃から小桃の事を聞いていた。

「あの子の名前は春園小桃<sup>はるのこもも</sup>と言います。わたくし小学生の頃からお付き合ひしていますわ。今は同じクラスですよ」

「小桃さんを何とか説得できないかしら？」

「無理ですわ。あの子はああ見えても、とっても頑固なのです」

「そう……」

その時に林檎が教室に入ってきて、コンロの前の椅子に座り、不機嫌そうにぶつくさ言った。

「最近そこいらの店で賞金グルメが出てきてるんだけど、挑戦しようとする断られるって、どういう事なのさ？」

それを聞いた鵜の顔つきが鋭くなる。

「……ついにこんな地方にまで触手を伸ばしてきたわね」

「あん？ 何の話だ？」

「それはイーストフードカンパニーの仕業よ」

「イーストフードなんちゃらって、確か闘食杯のスポンサーの？」

「紅野さんは知らないのかい？ イーストフードカンパニーは全国規模で展開している食の総合商社だよ。特に食材に対してすごい影響力をもっていて、今の日本の食材の流れは彼らが支配していると言ってもいいくらいなんだ」

「へえ、すごいんだね。でも、それと賞金グルメは関係ないだろ」  
すると鵜が言った。

「奴らは裏で暴力団まがいの事もしているわ。その中の一つが、食による搾取よ。無理やり賞金付のメニューを作らせ、そこへ三人一組で闘食家を送り込み、一気に三人分の賞金を持っていく。飲食店が従わなければ、食材が手に入らないように市場に手を回す。東京や大阪なんかの都心部では、それで廃業に追い込まれた店が数え切

れないほどあるわ」

「何だよそれ、何で訴えない!？」

「無理ね。賞金を出すのは店の意思だし、脅されたと言っても証拠など何も残さないから無駄だし、食材を回してもらえない事を証明しようとするれば、必ず妨害されるわ。中には大怪我させた人もいるくらいよ。企業は裏の世界とのつながりも深いから、個人の力ではどうにもならない」

「それじゃ、飲食店の恐怖支配じゃないか……」

「何でそんな事をするのですか？ 信じられない事ですわ」

「目的は三つあるわ。一つは闘食家が稼いだ賞金を企業の純粋な利益とする事。一つ一つは小さな額でも、全国規模で展開すれば企業の利益として十分に足るものとなる。二つ目は優良店舗の確保。立地の良い店舗を廃業に追い込み、そこにイーストフードカンパニーの息のかかった店を出すの。そして最後は、優秀な闘食家の発掘よ」

「闘食家の発掘って何だ？」

「その目論見が、わたし達にチャンスを与えてくれる」

「どういう事なのです？」

「商店街を守る為に、わたし達に出来る事があるということよ」

「なら膳は急げだ。後は行動あるのみ！ さあ大将、命令を！」

林檎が息巻いて言うのと、鵜は頷き、大群を指揮する將軍のような厳格さと気迫をもって虚空を指差しながらチームメイトに言った。

「敵は飲食店にあり、わたしたちで撃退するわよ」

「意外と乗りがいいな」

「フッ」

鵜は軽くあしらうように笑ってから言った。

「彼らは朝から何も食わずに、夕方以降に姿を現すわ。真名上君は胡桃と一緒にメイプルハニーに行つて、胡桃をサポートしてあげて」

「サポートって言つても、僕には闘食なんて無理だよ」

「貴方が一緒に行かないと駄目なのよ」

「あたしは鶴川駅近くのむさしの餃子に向かうよ。昨日行つたら、

賞金付があつたからな」

「わたしは東武駅前通りのかつ元に行つてみるわ」

そして少女達は教室を出ると、それぞれの戦場へと向かつて散つた。

老舗のかつ元では、がたいの良い男三人が店のカウンターに陣取つていた。

「親父、いつもの頼むぜ」

真ん中のプロレスラーのように肉付きのいい男が言うと、六十歳は超えているであろう白髪の主人は眉間にしわを寄せた。店の壁には『カツ井五杯、四五分以内に食べたら金五千円贈付』とあつた。老舗の豚カツ屋にはおおよそ似合わない貼り付けだ。

「何時までこんな事を続けるつもりだ？」

「何時まででもだ。この店がある限りはな。嫌なら止めてもいいんだぜ。この店に何も入つてこなくなるがな」

大男が豪快に笑うと、他の二人も合わせて笑い出す。

「わしに死ねと言うのか……」

その時、店の戸が開いて鷓が入ってきた。そして男達から一つの椅子を空けて座る。

「いらつしゃいませ。何にいたしましょう？」

「わたしが注文するのは」

鷓はおもむろに男達を指差して言った。

「この男たちとの勝負」

「な、何だと!？」

「三対一でいいわ。わたしはこの店の代表として戦う。あなたたち三人のうち一人でもわたしに勝つことが出来れば、そちらの勝利よ。その代わり、ルールはこちらで決めさせてもらうわ」

鷓は騒然とする男達をまるで無視して、淡々と言った。店主はあまりの驚きに声も出なかった。

「お嬢ちゃんが俺たちに挑戦すると聞こえたが、聞き違いだったか

な？」

「勝負方法は時間無制限のカツ丼勝負。より多くのカツ丼を食べた人の勝ちよ。料金は負けた方が全てを負担する。いいわね」

「どうやら本気みたいだな。いいだろう、そこまで言うなら勝負してやる」

「では、始めるわ」

鵜は箸立てから割り箸を取り、小気味良い音を立てて二つに割った。

鶴川駅近くにあるむさしの餃子に行った林檎は、三人の闘食家たちと対峙しながら、店のカウンターに拳を叩きつけた。

「ここは安くて美味しい餃子を食べさせる店だ。十人前で金五千円なんて出せるような店じゃないんだよ。そこから搾取しようなんてあんたらはフードファイターの風上にもおけない！」

「いきなり現れて、何だお前は!？」

搾取に現れたリーダー格の痩せた男が言った。連れの後二人の男は肥満体で、いかにも大食漢といった様相をしていた。そして、餃子を食べに訪れた沢山のお客さんもいて、周りで林檎と三人の男たちの様子を見ていた。

「こういう所で食うならちゃんと金を払おうよ。あんたら三人とあたしで勝負しようじゃないか。負けた方が全額負担するんだ。あんたらはこの勝負を断る事は出来ないよね。この店に手出しできなくなるからな」

「なるほど、それを知っているということは、お前は闘食家という事だな。いいだろう、この勝負受けた」

「よし、時間無制限でより多くの餃子を食った奴の勝ちだ。さあ親父、どんどん焼け!!」

周りで見ていたお客が熱くなり、次々と林檎を応援する声が上がっていた。

ケーキビュツフェのメイプルハニーでも、まったく同じ様な事態が起こっていた。店の壁には『ケーキ二十個を三十分以内に完食できたら五千円差し上げます』という張り紙があつたが、オーナが望んでしている事でないのは明白だった。

「三対一の勝負だから、ルールはこちらで決めさせてもらうよ。時間を無制限にするけど、いいよね？」

刃が言うと、イーストフードカンパニーから派遣されてきた太った中年女の闘食家はあざ笑った。彼女の後ろには二人の若い女闘食家も付いていた。

「構わないよ。あんたが戦うのかい？」

「いやいや、戦うのは僕じゃなくてこの子だ」

と言つて刃が紹介しようとする、胡桃の姿は忽然となくなっていた。刃が辺りを見ると、胡桃はケーキの前でなにやら喋っていた。それを見た闘食家の女達は、思わず失笑した。

「ちよつと、胡桃ちゃん、こつち来て！」

「刃様、大声をだして、どうかいたしまして？」

「頼むから勝手にどっか行ったりしないでくれよ……」

「ケーキたちが泣いていたからお話を聞いていましたの」

「ぷはは！！ 何言つてんだいこの子は、完全に頭がいかれちまつてるよ！」

「ケーキたちはあなた方には食べられたくないと言っていますわ。

あなた方に食べられてしまった仲間が本当に可愛そうだと泣いていました」

そう言われた中年女の闘食家は、無性に腹が立ってきて、胡桃を睨む。

「小娘、さつさと席につきな。あたしらと勝負するんだろう」

「勝負つて何ですか？」

「胡桃ちゃんは、ケーキを好きなだけ食べてくれればいいんだよ」

「好きなだけ食べていいのですか？」

「そつだよ。何も気にせずに食べたいだけ食べてね」

「まあ！ 嬉しいですね！」

瞳を輝かせて言う胡桃に、女闘食家たちは憎悪を募らせた。

「すぐに泣かせてやるよ」

「何でケーキを食べるのに泣かなければいけないのです？」

「お前ふざけているのかい！？」

「はいはい、勝負を始めますよ！ それでは時間無制限ケーキ勝負始め！」

刃は憤慨する中年女を遮って、無理やり勝負を始めた。

店主は祈るような気持ちでケーキを食べる胡桃の姿を見つめていた。今までは店にとって胡桃は脅威でしかなかったが、今は救世主だった。

女達がケーキを食べる速さは凄まじく、三人ともあっという間に二十個近くをたいらげて、マイペースで食べている胡桃を見下して笑った。その時は、胡桃は十個も食べていなかった。しかし、この勝負のポイントは時間が無制限というところにあった。胡桃はまったくペースを乱さずに、旨そうにケーキを食べていく。やがて胡桃が女たちに追いつくと、追われている方は慌てて胡桃のペースにあわせてケーキを食べ始めた。

闘食において胡桃のバランスの良さは類を見ないものがあつた。まったく同じペースを保ち、いくらでもケーキを食べるのだ。胡桃が二十三個のケーキを食べたところで、二人の若い女闘食家が脱落した。リーダー格の中年女の方は二五個まで頑張ったが、二十六個目を手に取った瞬間に、手を震わせてケーキを取り落とし、両手で口を押さえて急に立ち上がった。顔は蒼白で、戻しそうになっているのが誰の目にも明らかだった。そして彼女は躓いて転びそうになりながら、トイレに駆け込んだ。女は限界を超えても食べ続けているのだった。胡桃の方はというと、周りの事など気にせずに、三十二個までケーキを食べた所で手を止めた。

「あらいけませんわ、もうこんな時間、今日はヴァイオリンのお稽古があるのを忘れていましたわ。これで失礼いたします」

胡桃は急ぎ足で店を出て行った。

「お稽古がなかったらまだ食べたのかね……」

「まだまだ食べましたよ」

引きつった顔の店主に、刃は当然とばかりに言った。その時になつて、魂を抜かれたような顔になった中年女がトイレから出て来た。「君たちの負けだ。今まで食べたケーキは単品扱いにして、胡桃ちゃんに分まで支払ってもらうよ」

刃が言うと、中年女は悔しさのあまり両手両膝を床について呻いた。

「いい気になるんじゃないよ。分かてるよね、もうこの店はおしまいさ」

「君たちのような汚い輩に潰されるよりはましだよ」

店主は、はつきりとそう言い放った。

むさしの餃子では、林檎が十七人前、八十五個の餃子を食べ、男たちに圧勝していた。敵の方はリーダー格の男の一人前が限界だった。彼らは林檎が食べた餃子の料金まで払わされ、張り裂けそうに苦しい腹を押さえて店から出ていった。

かつ元でも勝負が進んでいた。かつ元の主人はカツ丼を作るのに忙しかったが、それでも目の前の状況から目を離す事が出来なかった。体の小さな少女が、凄まじい速さと抜群の安定感で出されたカツ丼を食べていくのだ。そして鶉は六杯のカツ丼を食べたところで箸を置いた。

「これで十分ね」

男達は鶉の食べる姿に釘付けになり、あまり食が進んでいなかった。

「貴方たちは搾取をする為の手駒、搾取をする以上の力は持っていない底辺の闘食家よ。わたしに追いつくことは出来ない」

「ふ、ふざけやがって！ こんなところで終わってたまるか！ やつと、やつと、イーストフードカンパニーの闘食家になれたっての

に！」

男達は躍起になってカツ丼を食べていった。しかし、三者三様に五杯を越えた途端に苦しげな表情を浮かべる。

「食え、死んでも喰うんだ！　ここで負けたら、お払い箱だぞ！」

男達は無理やりカツ丼を詰め込んだが、そのうち一人は不意に席を立ちカウンターを挟んだ座敷に仰向けになって、あまりの腹の苦しさに唸り始めた。もう一人は完全に戦意を失って箸を置いた。リーダーの大男だけは何とか六杯目のカツ丼を食べ終えようとしていた。

「もう止めておいた方がいいわ。貴方の身の為よ」

「うるせえガキっ！！！！　見てろ、見てろよ！！！！」

最後の男は完全に自棄<sup>やけ</sup>になっていた。そして無理に残りのカツと飯を喉の奥まで詰め込む。そこで彼は妙なうめき声を出して座席ごと真後ろに倒れ、カウンターの上に積んであった丼も一緒になって転げ落ち、そのうちのいくつかが砕ける。男は息を詰まらせて白目になっていた。鵜が男を起こして背中に拳を当てると、男は口の中のものを吐き出して息を吹き返した。

「だから言っただしよう」

「ぐう、ちくしょう……」

惨敗した男達は料金を支払って大人しく出て行くしかなかった。

後には鵜が店に残り、店主は彼女に向かって怒りを露にした。

「あんた、何て事をしてくれたんだ。これでもうこの店には一切の食材が回ってこなくなるんだぞ」

「潰されるのを待つか、潰されるのを覚悟で立ち向かうか、あなたはどちらを選ぶの」

鵜に言われて店主ははつとなった。どちらを選ぶのかと言われれば、もう答は決まっている。冷静に考えてみればすぐに分かることだが、状況が状況だけに、店主はそこまで深く考える余裕がなかった。

「……お陰で目が覚めたよ。ここいらの飲食店の関係者を集めて相

談してみよう。一人では無理でも、皆の力を合わせれば何か出来る事があるはずだ」

「それがいいわ」

鶯は微笑を残して店から出て行った。

「早く出せよ、五人前の大ラーメンをな。また賞金をもらっていつてやる」

「もう許して下さい。これで三日連続だ。このままじゃ店がつぶれる……」

軒庵楼の親父は涙目になって訴えた。髪を赤く染めた鋭い目をした若者は、他の二人の仲間の男たちと一緒に笑った。

「こいつ、いい年して泣いてやがる」

「十五年続いたこの店が、こんな形で終わっちゃうのか……」

「最初にも言ってるが、そっちも闘食家を用意すればいい。俺達と勝負して勝てば、この店には手出ししない。その後の事はどうなるか知らんがね」

親父は悔しさと悲しさのあまりに落涙した。

「その勝負、わたしが受けるよ！」

全員の視線が声の方集まる。店の入り口の戸が開いていて、そこに春園小桃が立っていた。

「気持ちはいがたいが、小桃ちゃんを巻き込む訳にはいかないよ」

親父が言うのも聞かずに、小桃は中に入ってきてカウンターの席に座った。

「止めるなら今のうちだぜ。土下座して謝れば許してやる」

「貴方たちなんかに負けない」

「なんだとこいつ、いい度胸じゃねえか」

「そっちは三人なんだから、わたしが勝負のメニューを決めていいよね」

「かまわねえぜ、餓鬼に負けるようなメニューなんて何一つないからな」

「じゃあおじさん、あれお願いね」

「あれって、この前のあれかい？」

小桃が笑顔で答えると、親父は心得てラーメンを作り始めた。

「勝負方法は、ラーメン早食い勝負だよ。出て来たラーメンを一番早く食べた人が勝ちだからね」

「馬鹿め、早食いは俺が最も得意とする勝負だ。お前は墓穴を掘ったぜ」

小桃はそう言う茶髪の男に、ふやけたような笑みで答えるのだった。

林檎はむさしの餃子を出ると、自転車で急いでペガサス通りに向かった。

「軒庵楼の事をすっかり忘れていたよ。もう流石に食べないけど、何とかして奴らを追い出してやる」

林檎が軒庵楼の前に着くと同時に、鵜も反対側から走ってきた。

「あ、鵜も来たのか」

「行きましよう」

林檎が店の戸を開けると、そこには予想だにしない光景が広がっていた。

「こんな辛えの食べねえよう……………」

「うるせえ、いいから黙って食べえ！」

「食べ終わったよ。ご馳走様でした」

涙を流しながら麺を啜る三人の男たちを尻目に、小桃が超大盛り激辛ラーメンを食べ終えたところだった。負けた瞬間に、男達はあまりの辛さと敗戦の衝撃でカウンターの上にダウンした。

「春園小桃さん……………」

「あれ、あなたは確か、鵜ちゃんだったよね？」

鵜が食い入るように見つめるので、小桃は恥かしくなって顔を背けた。

「おじさん、わたし帰るね」

「ありがとよ小桃ちゃん。すかつとしたよ」

小桃は親父に笑顔で答え、それから店を出て鵜の横を通り過ぎる。鵜は小桃の手を掴んで引き止めた。

「まって」

「え？」

「わたしと一緒に来て」

「前にも言ったでしょ、わたしは……」

「戦わなくてもいい。ただ、わたしたちの後ろで応援してくれるだけでもいいの。貴方がいてくれるだけで、わたしたちは安心して戦う事が出来る」

「そんな、皆が頑張ってるのに、それを応援するだけなんて……」

「闘食杯にこだわる必要なんてないわ。チームには貴方の友達の胡桃や真名上君もいる。わたしや林檎とも友達になって、見ていて欲しい。それでは駄目かしら？」

「……わかったよ、そこまで言うなら。それに、鵜ちゃん真面目で良い人そうだし、わたしも友達になりたいなって思ってたんだ」

「ありがとう」

鵜が微小すると、小桃も笑った。小桃は鵜の情熱に負ける形でチームに入った。何にせよこれで闘食杯に出られるだけのメンバーが揃ったのだ。

あなたはどちらを選ぶの……終わり

## 第五話 友達ってそういうものよ

東京新宿区のとある最高級ホテルの一室で、今年で二十歳になる桜子さくらこは、お気に入りの駄菓子を食べながら五十階から見下ろす絶景を眺めていた。年の割には幼げなピンクのリボンで長い黒髪をポニテルに纏め上げ、ピンクのタンクトップにジーンズのズボンというラフな格好をしている。見た目はただの女子大生でも、彼女は周囲の人間に一流のアスリートに似た圧倒的な力を感じさるのだ。

「大変、大変！！ 大ニュース！！」

いきなり桜子の部屋に少女が駆け込んできた。セミロングの黒髪をブルーサファイア製の星型のヘアピンで飾り、上は胸周りだけを隠す皮製の黒いチュートップでその上に黒のジャケットを着て、タイトなミニスカートも黒い皮製のもの、それに黒いブーツを履いていて、黒ばかりで大人を感じさせる色彩だ。そんな見た目とは正反対に、少女は黒い大きな瞳を輝かせて、年なりに幼さが残っている。彼女の名は楠木彩くすのきあやといった。

「うるさい、彩」

「あう、ごめんなさい、桜子さん。でも、すごいニュースなんだよ」  
桜子は床に積んである箱の中から菓子を掴み取り、袋を開けて中のチョコレートを食べた。彩の言う事にあまり興味がないという様子だ。

「例の地方侵攻でさ、うちの闘食家がやられまくったらしいよ。しかもそいつら、一人で三人に挑んで、同時に何組も闘食部隊を倒したてっさ。桜子さんは栃木出身だよ、心当たりとかないの？」

「ないわね。それで、どうなったの？」

「東北担当の鷺沼常務が大変な事になってる。地方への進出なんて造作もないって言ってただけにさ、いきなり出鼻を挫かれちゃって、さらにあんな田舎になんて闘食家はいないって高をくくって、スカウトを送っていなかったらしいの。だから、うちの闘食家がどんな

奴にやられたのか、よくわかっていないらしい。あ、そうそう、全員高校生だつて事だけは確からしいよ」

「鷺沼め、栃木を田舎と馬鹿にするからそういう目に合うのよ」

「でも、何で栃木なんだろうねえ？」

「餃子で日本一の県だからでしょ。餃子つてどこにでもある食べ物だし、それを押さえれば、後々の展開が楽だと考えたんだわ」

「まあ、そういう訳で、敵の正体が分からないから、スカウトが例の闘食家たちを見つけてこっちに引っ張り込むまでは、手を出せないわけ」

「見つけたところで、こちら側につくとは思えないわね。同時に何組もやられたとなると、向こうはこちらのやり方を知っているわ。」

話を聞いているだけでも、敵対意識をびしびし感じるわね」

「相手は強敵だ、常務の懐刀、チーム龍餓りゅうがのお出ましか」

「出ないわね。彼らも私たちと同じで、テレビの出演やら闘食大会の出場やらで忙しいからね。どこにいるかも分からない闘食家を追いかけるなんて、会社にとっては損失にしかないわ」

「だよー、栃木の田舎に行くような人たちじゃないか」

「田舎つて言うな、わたしの故郷なんだから」

「だって、何にもないじゃん」

「色々あるわよ、馬鹿にしないで」

「例えば？」

「そうね、わたしの実家の近くではあらゆる種類の山菜が山ほど取れるわ。それこそ、このわたしでも嫌つて言うくらい食べられるの。天ぷら、おひたし、胡麻和え、何でもござれよ」

「それつて、めちゃ田舎じゃん、っていうか山奥だよ！ 熊とか出ない！？」

「失礼ね、熊なんて出ないわよ。狐なら見た事あるけど」

「うあ、狐……。わたしには想像できない世界だな……」

「実家がたまたま田舎なだけで、都会だつてちゃんとあるわよ」

「ふーん。じゃあ、栃木で一番高い建物は何？」

「十五階建ての県庁かしら……彩、何笑ってんのよ」

「だってさ、私たちが泊まってるホテルって、何階建てだと思う？」

「東京のビルが高すぎるのよ。高けりゃいいってもんでもないですよ」

桜子は不機嫌そうに言いながら、また箱から駄菓子の一つ取って袋を開ける。何故か彩も同じものを手にとっていた。

「こら、勝手に人のものを食べるな。しかも新しい箱開けたわね」

「いいじゃん。どうせ全部食べるんだから、どれ開けたって同じだよ。……むお、このチョコレート超美味しいんだけど!？」

「そうでしょう。ブラックスパークは駄菓子界の革命児よ」

桜子が掌に収まるくらいの四角いチョコレートの塊を口に放り込むと、辺りに甘い香りが漂い、噛むごとにビスケットのさつくりとした、いかにも旨そうな音が聞こえる。彼女は全てを飲み込んでから言った。

「沙耶子は何か言ってた？」

「沙耶姉さんは、目の前の敵を叩き潰すだけだったさ」

「あの人は何があってもぶれないわね」

「天下の闘食女王ですから」

「あんたは昼からライブとか言ってたわよね。それ正装？」

「そう。マネージャー待たせてるの」

「さっさと行きなさい。遅れたら大騒ぎになるわよ」

「平気だって、まだまだ時間あるし」

彩は駄菓子の箱を一つ両手で持つと、それを頭の上に乗せた。

「一箱もらってくね」。移動の車の中で食べるから

「ちよつと、こら、待て!」

彩は桜子が動く前に素早く出て行った。

「まったく、油断も隙もないんだから……」

桜子は地上五十階から見下ろす景色を見ながら、故郷に残した家族の事を思った。彼女の様子は心なしか寂しそうだった。

家庭科室に備え付けてあった冷蔵庫は、突如として最新型の巨大な冷蔵庫に変わっていた。それが刃にとてつもない試練を与えることになった。

「な、なんだこの冷蔵庫は!!?」

「わたくしが学校に寄付いたしました。刃様の為に中にはあらゆる食材が入れてありますわ。心置きなく料理して下さいね」

「胡桃ちゃんは僕を殺すつもりなのかい……?」

「料理を作る事は刃様にとって人生そのものですわ。わたくしは少しでも刃様のお手伝いがしたいと思っていますのよ」

「僕は今ほどパティシエを目指したのを後悔した事はない……」

「何やってんの、さっさと作れよ!」

林檎の櫛が飛ぶと、刃は目頭が熱くなってきた。

「どうして僕が君たちの為の料理を作らなきゃいけないのかな?」

「マネージャーの役目は、チームメイトの精神的なケアよ」

「あたし達にとってそれはつまり食うこと、だから早く作れ」

酷く控えめに聞く刃の身体に、鵜と林檎の言葉が矢のように突き刺さる。刃はもう逃げられない事を知って覚悟した。

「こうなったら、僕の持てる力の全てを、君たちに叩きつけてやる!」

「おお、真名上君が燃えてる」

「刃様、素敵ですわ」

刃の悲愴な覚悟も知らずに、小桃と胡桃は喜んでいた。

「おお、神よ。あの四人を相手に料理を作るなんて、あなたはなんという試練をお与えになるのでしょうか。しかし、僕はこれを楽しみ越え、一流のパティシエになってみせます!」

家庭科室の片隅で刃が必死に料理を作っている近くで、少女達は雑談の花を咲かせる。

「新しいの出たから買ってきたんだ」

「表紙は小桃さんのお気に入りの方ですわね」

「それ何?」

林檎が言つと、小桃が手に持っている雑誌の表紙を見せた。

「芸能雑誌だよ。この表紙の子がね、楠木彩ちゃんって言って、歌って食べれるアイドルフードファイターなんだよ。可愛いし、スタイルも良くてグラビアもやってるし、わたし大ファンなんだ」

「こいつがそんなに良いのか？」

林檎は楠木彩の特集のページを開くと、読み進むごとに顔つきが険しくなっていた。

「顔が可愛くて、人気者、スタイルも良くて、女子高生最強の闘食家だーっ！！ ふざけんなーっ！！」

林檎は雄叫び上げて、雑誌を真つ二つに引き裂く。小桃も胡桃も驚いて目を白黒させた。

「林檎ちゃん、ひどいよ。わたしの雑誌……」

「う、ごめん小桃。つい力が入った。この楠木彩って奴は、どうも相容れないものがある。アイドルで女子高生最強の闘食家とは笑わせる。闘食の道はそんなに甘くはない」

そんな林檎の勢いを削ぐ様に鵜が言った。

「闘食家としての楠木彩を見れば、あなたの考えは変わるわ」

「お前が他人の肩を持つなんて珍しいな」

「全ての物事を正しく見極めなければ勝負には勝てない」

そこへ刃がオードブルを運んでくる。

「楠木彩って、テレビによく出てるのに、紅野さんは知らないの？」

「あたしの家にはな、テレビなんてものはないんだよ！」

「テレビがないだつて！！？ 今時そんな家庭があるなんて！！？」

「あたしのお気に入りチャンネルはLAC5だ！ 文句あるか！」

「いえ、ありません……」

刃が林檎の勢いにへこまされたその時、オードブルを食べた小桃と胡桃の間から美味しいという声が漏れた。

「あ、お前ら、あたしにも食わせる！」

刃が出来る限り数を作ったオードブルは瞬く間に消えていった。「早く次の料理を作らないと、何を言われるか……」

刃は台所にもどって手早く料理を作り始める。

「はあ、そろそろケーキが食べたいですね。それにケーキたちの喜ぶ声を聞かないと、心が荒んでいってしまいそうです」

「急に電波を飛ばすな。頭の中プリンで出来てるんじゃないのか？」

「頭の中がプリンだなんて、それは素敵な事ですわね」

「そう思うのはお前だけだ……」

林檎と胡桃のやり取りを見ていた小桃が、何故だかさつきから溜息ばかりついている鵜に、会話に入ってもらおうとして言った。

「頭の中がプリンって、鵜ちゃんはどう思う？」

「頭の中がプリン……」

「頭の中がプリンだったら、遭難したらそれを食べて生き延びられるよね」

「でも、頭を開いた時点で死んでしまうような気がしますわ」

「あ、そっか。でも、一緒に遭難した人がいたら、その人の糧になれるよ」

「人助けが出来ますわね」

胡桃と小桃が笑うと、それを聞いていた林檎がむかつ腹を立てた。  
「そんなもん食うくらいなら死んだ方がましだーっ！　っていうか、何でそんな理解不能な話で盛り上げられる！？　聞いている方の頭がおかしくなる！」

「胡桃ちゃんと小桃ちゃんは何時こんな感じだから、一々突っ込んでたらきりがないよ」

そう言ったのは、新たな料理を運んできた刃だった。その後で林檎は刃お手製の山盛りパスタを食べながら言った。

「お前、昔からこの二人と一緒にいるのか？」

「小学生の頃からね。お陰であの二人の会話には慣れたよ」

「苦労してんな」

「その、ものすごい哀れみの目で見るのは止めてくれないかな……」  
その時、鵜が深い思考の末に口を開いた。

「色々考えてみたんだけど、頭の中がプリンの人は神経も通ってい

ないわけだし、生きた屍になってしまおうと思うわ」

「深山さん、そんな大真面目に考えなくてもいいからね……」

その後で、またもや鵜は深い溜息をついた。小桃が心配そうに言った。

「鵜ちゃん、さつきから溜息ばかりだね。何か嫌な事でもあるの？」

鵜は見るからに気が進まないという様子で言った。

「姉さんが、あなた達を家に連れて来いって、顔を合わせる度に言うの」

「ほんと、じゃあ今度みんなで遊びに行こうよ！」

「鵜さんのお家ですか。一度お邪魔してみたいですわね」

「このままだと姉さんがうるさいし、明日にでも来るといいわ」

「鵜の家ってどこにあるんだ？」

「市内にある焼き鳥屋よ。姉さんが一人で切り盛りしてるの」

焼き鳥屋というのを聞いたとたんに林檎の目の色が変わった。

「なに、焼き鳥屋！？ 焼き鳥食い放題じゃないか！？」

「お店の商品を勝手に食べたりしたら叱られるわ。でも、姉さんが友達を連れてきたら、いくらでもご馳走してくれるって言っていたわ」

「よっしゃ！ 小桃、手帳を開け！ 明日のスケジュールを立てるぞ」

「そう言うと思ってもう用意してた」

「食べ物が絡んだとたんに、行動力が大幅に上昇するね……」

呆れ顔で言う刃の事など蚊帳の外において、少女たちは真剣に明日の予定を話し合っていた。その時に林檎が不意に刃を見つめて言った。

「お前は突っ立ってないで、早く料理を作れ！」

「まだ作らなきゃ駄目なの……？」

「あたしらはまだ満足してない。話し合いが終わるまでに料理出せよな」

「わかったよ、作ればいいんでしょ！」

刃は半ば自棄になつて調理場に戻つた。そして彼は、精も魂も尽き果てるまで料理を作らされるのだった。

翌日の放課後、鵜はペガサス通りで先を歩いて仲間達を家に案内していた。はつらつとして元気な少女たちの中で、刃だけが疲れ果てた顔をしている。

「はあ、昨日は酷い目にあつた。右腕が痛くて上がらないんだよね……」

「まあ、刃様。どこでお怪我をなされたのです？」

「昨日倒れるまで料理を作らされたからだよ！　フライパンの振りすぎで腕が筋肉痛なの！」

「あの程度で音を上げるとは、情けない男だ」

「君が何と言おうと、僕はあの苦行に耐え切つた自分を褒め称えたいね」

他愛のない話を続けている間に、鵜たちは商店街を抜け、やがて飲み屋の多く立ち並ぶ裏路地に入つた。

「あれよ」

鵜が指を差したのは、立ち並ぶ店舗の中でも特に小さな店だった。「何か貼つてあるな。都合により今日は休むつて書いてある」

「あなたたちが来ると聞いて、姉さんがわざわざ休みにしたのよ」

鵜が店の戸を引くと、鍵はかかつておらず、すんなり横に滑つた。「いらつしやい、待っていたわよ」

店に入ってきた少女達を出迎えたのは、少し癖のある長い黒髪を後ろで結わえた割烹着姿の女性だった。少しカールのかかったような前髪がチャームポイントの可愛らしい顔立ちで、古びた店の雰囲気さがさらに鵜の姉の美しさを際立たせていた。

「えと、初めまして、わたし鵜ちゃんの友達の春園小桃と言います」  
小桃が言つと、それに習つて胡桃、林檎、刃も順に自己紹介していった。すると女性は、何が嬉しいのかと思うくらいの笑顔を浮か

べた。

「わたしは鶇の姉の深山瑠璃みやまろじよ、よろしくね。さ、好きなところに座ってちょうだい。狭くて汚いお店だけど、味には自信があるわ」

「こういう店のカウンターに座ってみたかったんだよな」

林檎がカウンターの席に座ると、他のメンバーも同じ様にカウンターの前に落ち着き、五人が横並びになった。

「へえ、このお店では商品をガラスケースに入れてるんですね」

「まるでお寿司屋さんのようですね」

「こうしておけば目で見て本当に食べたいと思うものを選ぶでしょう」

「うわあ、美味しそうだな」

「どれから食べるかな」

小桃と林檎はガラスケースの中身しか見ていなかった。

「わたしのおごりだから、好きなだけ食べてちょうだい」

「そ、そんなことを言うところろしい事になりますよ!？」

本当に恐怖と言う刃に、瑠璃は笑顔で答える。

「大丈夫よ。あなたたちの事は鶇から聞いているわ。五十本でも百本でも焼いてあげるわよ」

「よし決めた。鳥も十本と、鳥皮五本と、砂肝五本、あと軟骨五本、とりあえずそれで行く」

「じゃあ、わたしもとりあえず、鳥も五本と、皮三本と、ぼんじり三本に、軟骨四本お願いしま〜す」

「わたくしはとりあえず、鳥も三本に、鳥皮三本、ハツ三本、レバー三本、軟骨三本にしますわ」

「承りました。すぐに焼いてあげるわ」

瑠璃は少女たちの注文に当然のように応じていたが、はたで見ている刃の方が青い顔をしていた。

「今の注文で五十本超えてる。しかも全員とりあえずと言っているのが恐ろしい……………」

それからしばらくして、大皿一杯に山のようになった焼き鳥が出

てきた。

「地鶏を炭火で焼いて特製ダレをたっぷりつけた、自慢の焼き鳥よ」  
早速それを食べた少女たちは口々に言った。

「おいしい！　こんなおいしい焼き鳥を食べたのは初めてだ！」

「もう死んでもいいっていうくらい美味しい！」

「地鶏は良く食べますが、こんなに美味しいものは初めて口にしましたわ」

「…おい、なんか一人だけ言ってる事がおかしいぞ」

「胡桃ちゃんは大金持ちのお嬢様だからね」

みんなが盛り上がっている横で、鶇は姉の様子を気にしながら黙っていた。

「鶇、食わないのか？」

「わたしの事は気にしないでいいから、みんなで食べて」

鶇は林檎にそっけなく言うつと、何かを押し隠しているような様子で下を向いてしまった。

「みんなは鶇とどういうお友達なの？　クラスメイトなのかしら？  
それとも何か目的があって集まっているの？」

瑠璃が言うつと、鶇の眉がわずかに眉間によった。それは鶇が最も聞いて欲しくない事だったのだ。

「クラスは全然違うよ。あたしは闘食杯に誘われたんだ。あの時は、いきなり勝負を挑んでくるから驚いたな」

「わたしもそう、応援担当だけど」

「わたくしは、甘いものが沢山食べられるとお聞きしましたので、鶇さんと一緒にいるのですわ」

「胡桃ちゃんはこのチームの趣旨を未だに理解していないんだね…」

その時、瑠璃は急に悲痛な表情を浮かべて妹を見つめた。姉妹の様子がおかしいのと空気が急に張り詰めた事で、林檎たちは怪訝な顔をする。

「鶇、まさか沙耶子と戦うつもりなの！？」

「そうよ、あの女だけは許すことは出来ない！」

いつも静かな鵜が激しい口調で言うので、他の四人はすっかり驚いてしまった。鵜は我を忘れたように、怒りを露にして言った。

「全力を尽くして最後まで戦った姉さんを、あの女は笑った。あの時の声が今でも頭の中で響いてる。あの女の姿も忘れられない。でも、何よりも許せないのは、あの時何も出来なかった自分自身よ」

「あの時の鵜は小学生だったのよ。そんなに気に病む必要なんてないわ」

「それでもわたしは華喰沙耶子と戦いたい。そして、わたしたちの全てをぶち壊しにしたあの女を倒したい！」

「鵜……」

瑠璃は悲しそうに呟いた後、ぱつと顔を明るくして林檎たちを見た。

「ごめんなさいね、急に大声出したりして」

「その沙耶子って奴と鵜の間に何があっただ？」

「人に話すような事じゃないんだけど、鵜と一緒に闘食杯に出る貴方達には聞く権利があるわ。今から五年前の事よ」

瑠璃はしばらく目を閉じて、当時の事を思い出してから言った。

「わたしたちは元々東京の下町に住んでいて、やっぱり焼き鳥屋をやっていたわ。お店を経営していたのはお父さんだったけどね。あの頃わたしは闘食家だったの。有志を募ってイーストフードカンパニーに対抗する闘食団体を作ろうとしていたわ。神奈川や東京の目ぼしい場所にいつては、イーストフードカンパニーの闘食家たちを撃退したりもしていた。そんな事をしていれば、当然狙われるわ。あの頃のわたしは学生で考えも甘かった。イーストフードカンパニーの妨害にあつて、うちの店は瞬く間に潰れる寸前まで追い詰められてしまったの。そんな時に華喰沙耶子が現れたわ。彼女は闘食で勝てばお店の妨害を止めるという条件を出して挑んできた。わたしはそれを受けて、限界を超えた闘食の末に、倒れて病院に運ばれたの。それから坂を転げ落ちる小石よ。お店は潰れてお父さんは心

労とショックで倒れるし、お母さんはお父さんに付つきりでないければならなかった。そうしてわたし達家族は、この栃木の地に逃げるように越してきたのよ」

そこまで言うと、瑠璃は悲しげな目を妹に向けた。

「わたしと沙耶子の勝負を間近で見ていた鵜はトラウマを背負ってしまったて、人間不信に陥ってしまったの。中学生の頃は誰とも馴れ合わず友達もいなかった。本当に可愛そうな事をしてしまったわ」

「姉さんは悪くないわ」

「いいえ、わたしが浅はかだったの。全部わたしのせいよ」

「違うわ！ 姉さんは正しい事をしていた！」

「鵜、もういいのよ、ありがとう」

それから瑠璃は元の柔和な笑顔を取り戻して言った。

「でも、よかったわ。鵜があなたたちと一緒に歩いているのを街で見かけた時は、本当に嬉しかった。みんな、これからも妹と仲良くしてあげてね」

瑠璃がそう言うと、鵜は何故か姉から目を背けて黙っていた。

「沙耶子もイーストフードカンパニーも、絶対に許せないよ！」

「その話を聞いて、俄然やる気になった！ 沙耶子を必ず倒してやる！」

「ええ……」

怒りを燃やす小桃と林檎に、鵜は何か後ろめたい事があるような、はつきりしない返事をした。

「暗いお話はここまでよ。さあ、どんどん食べてね」

それから少女たちの追加の注文をする声が店を明るくした。

やがて夕暮れ時になり、皆が帰って鵜と瑠璃だけが店内に残った。鵜は店の片づけを手伝い、店内を箒で掃いていた。カウンターの向こうで食器を洗っていた瑠璃が言った。

「みんな良いお友達よね。鵜の方から声をかけたというから驚いたわ」

「……わたしには、あの子達の友達になる資格なんてない」

「どうしてそんな事を言うの？」

鵜は答えずに、ただ黙々と箒で床を掃いた。そんな妹の姿を見つめながら、瑠璃は微笑を浮かべて言った。

「鵜が何を考えているのかは分からないけれど、あの子達は貴方を慕って集まり、貴方の周りで楽しくお喋りしたり笑ったりしている。友達ってそういうものよ」

姉の一言を聞いて、鵜はいくらか救われたような気持ちになり、顔を上げた。その時に店の前にある建物の隙間に沈んでゆく夕日が見えて、目を細めた。鵜は本当に美しい夕日だと、心の底から思うのであった。

友達ってそういうものよ・・・終わり

## 第六話 それでも胸を張って言える

放課後の家庭科室はすっかり少女たちの居場所になっていた。今は鶇以外の四人がいて、唯一男子の刃は胡桃の隣に座っている。女子高生三人が無駄話をする中で、彼は居づらくてしょうがなかった。

「小桃は何で小桃なんだ？」

林檎は鶇が来るまで暇だったので、何となく思ったことを小桃に尋ねる。

「え？ 名前の事？」

「そうだ。暇だから名前のルーツでも探求しようと思ってな」

「えっとね、わたしが生まれた時は、お母さんすごく迷ってたらしいんだけど、大好きな桃を食べていたら閃いたんだって」

「それ閃いてないよ、そのままだよ！？」

刃の突っ込みを無視して、少女達は勝手に盛り上がる。

「林檎ちゃんはどうして林檎ちゃんなの？」

「ああ、あたしが生まれた時にさ、母さんの実家の青森からお祝いに林檎と沢山送ってきたらしい。母さんはそれを見て、これだっと思っただとさ」

「林檎ちゃんのお母さんのインスピレーションも中々だね」

「そうだろう。胡桃はどうなんだ？」

「わたくしは、生まれた時に丁度お庭の胡桃の木に沢山の実がついていて、お母様がそれを見て胡桃という名前にしたのですわ」

「胡桃の母さんも、なかなか良いセンスをしている」

「みんな名前が食べ物だね」

「運命を感じますわ」

「僕には名前を考えるのが面倒だったとは思えないけどね……」

刃が言っても少女達は話に夢中で気付かない。彼は妙な疎外感に苛まれて、いつの間にか胡桃から少し離れた席に座って窓から外を見ていた。刃が気になってちらと少女たちのことを見ると、林檎と

目が合った。

「その捨てられた子犬のように寂しそうな目をした少年、可哀そうだからお前の名前の事も聞いてやるよ」

「そんな目はしていないし、聞かれないとも思っていないから!!」

「何だと、この林檎様が優しい気持ちで聞いてやってるのに!!」

刃は林檎に睨まれると、仕方ないという様子で咳払いした。

「そんなに聞きたいと言うのなら、教えてあげよう」

「なんかむかついたから、もういいや」

「ちよつと、待って!!」

「刃様の事でしたら、わたくしからお話いたしますわ」

「いや、いいよ胡桃ちゃん! どうせ話すなら自分で話すから!」

「しょうがねえな、聞いてやるからさっさと話せよ」

「うっ、何か一気に話す気がなくなっただけ、話さない訳にもいかない状況だ……」

そして、刃が口を開こうとすると、林檎がいきなり掌を刃の目前に近づけて、それを静止した。

「ちよつと待て」

「な、何!」

「ジーンってどういう字を書くんだった?」

「そこから!!」

咄然としている刃の代わりに胡桃が言った。

「刃の一字をもつて刃と読むのです」

「うわ、お前、名前負けしまくりだな」

「うるさいな!」

刃はいきり立った後に、心を落ち着けてから言った。

「父さんは僕が生まれた時から料理人にしようと思っていて、美味しい料理が作れる料理人になれるようにと願いを込めて刃という名前を付けたんだ」

「なんだそれ、つまんない名前だな」

「君にだけは言われたくないよ!」 その場の思いつきで考えた名

前なんかよりもずっと奥深いでしょ!？」

「どうせなら包丁にすればよかったのに、真名上包丁君、ぷはは!」

林檎が自分で言っただけだと受けていると、小桃と胡桃も爆笑する。

「君たち、いい加減にしろー!!」

その時、家庭科室の扉が開いて鵜が姿を現した。

「ごめんなさい、生徒会の会議が長引いてしまったわ」

「おお、鵜、いいところに来たな。今みんなの名前の話で盛り上がっていたところだ」

「名前の話？」

「そうだ。鵜は何で鵜って名前になったんだ？」

鵜は電気コンロの前に椅子を持ってきて座り、鞆を床に置くと言っ

た。  
「鵜<sup>つくみ</sup>って美味しいらしいわ」

「え!？」

鵜が何の脈絡もなく言うので、全員が声をあげて驚いた。鵜はそんなメンバーの様子を気にもせずに淡々と話した。

「お父さんがいつかその手で料理してみたいって言っていたわ」

それを聞いた小桃と胡桃は、顔を青くしてこれ以上ない恐怖をその表情に湛える。

「だ、だ、駄目だよそんなの!？ 確かに鵜ちゃんはちっちゃくて可愛くて、食べたら美味しいのかもしれないけど、自分の娘を料理したいなんて、そんなの絶対おかしいよ!？」

「恐ろしいのですわ。そこまでいってしまうと、もう猟奇映画と同じなのですわ……」

「君たち!?!？ それは盛大すぎる勘違いだよ!! 深山さんが言っているのは、鵜って言う名前<sup>ひな</sup>の鳥の事だからね!!」

「え? 鳥? そうなんだ。吃驚<sup>びっくり</sup>して心臓が止まっちゃうかと思っ

たよ」  
「わたくしなんて、あまりの恐ろしさに足が震えていますわ」

「どう考えてもそれは有り得ないだろ。お前らはどうして毎度そんな阿呆な妄想が出来るんだ？」

「えー、今のは誰だつて勘違いするよ。それよりも、鵜ちゃんと同じ名前の鳥さんつて、そんなに美味しいの？」

「ものすごく美味しいらしいわ。でも、それが原因で乱獲されてもう少して絶滅するところだったのよ。今では狩猟禁止になって、日本では鵜料理を味わうことは出来なくなつたわ。鵜は幻の食材よ」

鵜が幻の食材と言つたところで、メンバーの間に電流のような衝撃が走る。そして、林檎がいきなり四つん這いになり、敗北感を露にして言つた。

「あたしの負けだ…」

「完膚なきまでに負けたね…」

「完敗なのですわ…」

「何それ！？ どの辺りで負けてるの！？ 僕全然分らないんだけど！？」

刃が言っている側で、林檎は敗色を吹き払い立ち上がつて言つた。

「鵜は親父が料理したい食材の名前を付けられた訳か」

「認めたくないけど、そうよ。由来はあれだけど、この名前は気に入っているわ」

「あたしたち全員、名前が食い物だな。もはや刎頸の交わりと言つても過言ではない」

「さしずめ僕は、君たちを料理するシェフと言つたところかな」

刃が思わず口走つた瞬間、少女達は時が止まつたように固まつて、氷付くような静寂が訪れた。そして次の瞬間、堰を切つたように騒ぎが起こる。

「お前に料理されるくらいなら、鳥にでも食われた方がましだ！」

「きゃーっ、真名上君、何かその発言すごく嫌らしいよ！」

「刃様にお料理して頂けるのなら、わたくしは嬉しいですわ」

「まじか！？ お前らそういう関係だったのか！？」

「真名上君、胡桃ちゃんに破廉恥なことしちゃだめだよ」

「ちよつ、ちよつと君たち、話が飛躍しすぎだよ!!」

刃が余計な事を言ったと激しく後悔したのは言うまでもない。

林檎たちが大騒ぎしている横で、鶯は真剣に考えた末に言った。

「真名上君」

「な、何、深山さん?」

「鶯は小さな鳥だから、料理すると言っても串焼きくらいしか出来ないと思うわ」

「このタイミングでそんなに真面目に返されると、リアクションに困るよ……」

小桃と胡桃は、串焼きと聞くと抱き合って震え出した。

「串焼き怖い」

「何て残酷な仕打ちなのでしょう……」

「だから鳥だつて言つてんだろ! 生々しい想像をするな!」

林檎が怒鳴ると二人は余計にきつく抱き合って震えるのだった。

無駄話の後、少女達はやる事もないので、帰る事にした。

鶯達はバスの停留所に向かって校庭を歩いていく。その時に胡桃が言った。

「あまりの恐ろしさに糖分が減ってしまいましたわ。ですから、みなさんでケーキビュッフェに行きましょう」

「賛成」

「……恐怖で糖分が減るって、どういう事だ?」

「胡桃ちゃんは何でもケーキを食べる為の理由にするから、深く考えない方がいいよ」

刃が耳打ちするように林檎に言ったとき、一番前を歩いていた小桃がみんなの方に振り返って言った。

「みんな行くよね?」

刃はそれを聞いて周りのメンバーを見渡すと、途端に世にも恐ろしい事実気付いた。

まずい、このメンバーで行ったら、メイプルハニーの息の根が

止まる！！　しかし、慌てるな、僕には秘策がある。彼女に話を振れば、きつと止めてくれる。

「あのさ、みんな、こんな人数でケーキビュッフェは止めたほうがいいよ」

『何で？』

胡桃と小桃が心の底から訳が分からないという顔をして同時に言う。

「君たちの反応は予想通りさ……。でも、深山さんなら分かるよね？」

「……え？」

「あ、あれ？」

「鵜ちゃんも行くよね、ケーキビュッフェ」

「ええ、せっかくだから一緒にするわ」

刃は密やかに激しい打撃を受けながら心の叫びをあげた。

深山さん、理解してなーいっ！？　馬鹿な、予想外過ぎる！

？　どうするんだ、どうやって止める！？　っていうか、何で僕がこんなに悩んでいるんだ？　どうでもいいと言えば、どうでもいい事じゃないか。いや、しかし、このままメイプルハニーが潰れるのを見過ごすわけにもいかない。それは人として許されない事だ！

刃がなんだかよく分からない正義を燃やしている間に、小桃は林檎に言った。

「林檎ちゃんも一緒に行こうよ」

「いや、あたしはいい。お前達だけで行ってこいよ。じゃあ、あたしは自転車だから、また明日な」

と言って、林檎は誘われるのを嫌うように自転車置き場の方に走っていった。林檎の走っていく後姿を見ながら、小桃は残念そうに言った。

「また嫌われちゃった」

「林檎さん、何度お誘いしても、お受けしてくれませんかね」

「一度くらいみんなでお茶したいよね」

「毎日あんなに急いで帰って、何をしているのでしょうか？」

二人の会話を聞いていた鵜は、突然思いついたように言った。

「気になるわね。探ってみましょう」

「探るって、どうするの？ 林檎ちゃんは自転車通学で、わたしたちはバス通学だよ？」

「大丈夫、わたしに任せて」

「林檎さんがいないので、ケーキビュツフェはお預けですわね」

「そうだね、ビュツフェはそのうちみんなで行こうね」

「とりあえずバスに乗って東武宇都宮駅近くまで行くわ」

三人の少女たちは小走りバス停の方に向かう。その後、刃は迷走する思考から現実に戻ってきた。

「やっぱり駄目だ！ 僕は何としても君たちを止める！ 例え変な目で見られようともかまわないさ、僕の行動に一人の男の人生がかかっているんだからね！！」

刃が意を決して言った時、目の前には誰もいなかった。さらに刃の後ろから歩いてきていた何人かの女生徒が、通り過ぎる時に失笑していた。

「あ…あれ？ みんな、どこいったの！？ ちょっと待ってよ！？」

鵜は東武宇都宮駅近くでバスを降りると、まっすぐにアルテミス通りに向かった。その足取りに迷いは感じられない。小桃と胡桃はただ何となく付いてくるだけだったが、刃はどうしても拭いがたい疑問があつて、そのうち我慢できなくなつて言った。

「あの、深山さん」

「何かしら？」

「君はどこに向かっているのかな？」

「林檎はまず、この辺りのお店で食賞金稼ぎをするわ」

「何でそんな事が分かるの…？」

「わたしはチームのリーダーよ。メンバーの事なら何だって分かるわ」

「ええ！？ じゃ、じゃあ、わたしが小学校高学年まで怖い夢を見

るたびにおねしょしてた事とかも!？」

「わたくしが夜おトイレに行くのが怖くて、未だに爺やに付き添ってもらっている事ですか!？」

「いえ、そこまでは知らないわ」

「二人共、華麗に自爆したね」

「有益な情報をありがとう」

『はうつ!?!』

小桃と胡桃が同時にショックを受けて放心している近くで、刃は少し胸の鼓動を早くしていた。

まさか、僕の秘密の趣味までは知るまい……

「真名上君が、あんな趣味を持っている事なら知っているわ」

「な、何だって!?!？」

鵜が言うつと、刃は息が止まりそうになった。

「お願いだ深山さん、それだけは誰にも言わないで……」

「大丈夫よ、真名上君。わたしは何とも思っていないし、小桃と胡桃だって、寛大に受け止めてくれる。だから怖がる必要なんてない。さあ、この場で打ち明けてしまいなさい」

「そ、そうか、そうだよね！ 実は……」

刃は言いかけて何だかおかしいことに気付いてはつとなる。

「ちよつとまって、何で僕が自分の趣味の事を明かさなきゃいけないの?」

刃が言うつと、鵜は残念そうに深い溜息をついた。

「おしかつたわね、もう少しだったのに」

「何が!?!？」

鵜はただ刃を誘導尋問していただけだった。

「深山さんやめてよね！ 君が言う事は冗談でも本気にしか聞こえないんだから!」

その時、放心していた小桃が急に正気に戻って言った。

「あ、林檎ちゃん発見」

林檎は自転車を止めて、お好み焼き屋に入っていくところだった。

鵜達は素早く移動してお好み焼き屋の中を外から覗いた。四人も固まっているの、傍から見ると結構怪しかった。

「七人前のお好み焼きに挑戦しているわね」

「鵜ちゃんの言った通りだね」

その後、林檎は当然の如く七人前のお好み焼きを食べきって賞金を得て、店を出るとその足で靴屋に入り、賞金でアニメのキャラがプリントされた子供用の靴を買っていた。その後は、東武宇都宮駅に近いコンビニエンスストアに足を運ぶ。鵜達はこそこそその後をつけていた。

「思ったんだけどさ、これって何か意味があるのかい？」

「林檎の秘密を色々を知ることが出来るわ」

鵜の即答に、刃は苦笑いを浮かべる。

「これって完全にプライバシーの侵害だよ。もう止めたほうがいいよ」

「大丈夫よ。林檎はチームのメンバーだから問題ないわ」

「いや、問題ありまくりでしょう！ 胡桃ちゃんと小桃ちゃんだつてそう思うでしょ？」

刃が言った時、胡桃と小桃は林檎の姿を真剣に目で追っていて、何を言われたかなど聞いていなかった。

「あ、林檎ちゃん出て来た」

「何か持っていますわね」

「どうやらバイト代をもらっていたようね」

「そっか、林檎ちゃん、アルバイトしてたんだ。だから、わたしたちとお茶する時間もなかったんだね」

「謎が一つ解けましたわね」

「先回りするわ、付いてきて」

『はい』

三人の少女達は刃をその場に残して次の目的に向かって歩き出した。

「…女の子って、他人の秘密を知りたがる生き物なのかな……？」

鵜たちはバスに乗り戸祭町へ移動する。そして彼女達は、古びた一軒家の前についた。

「ここが林檎の家よ」

「深山さん家まで知ってたの!？」

「さすが鵜ちゃん、情報通」

刃が驚き、小桃が楽しそうに言う。

「古いですが、思っていたよりも立派な家ですわ」

「それは管理人の家よ。林檎の家はこの奥」

その時、向こうの丁字路を自転車に乗った林檎が曲がってきた。

鵜たちは慌てて管理人の家の植木の後ろに隠れてやりすくす。林檎が管理人の家の脇にある細い通路に入っていた。四人は見つからないように後をつける。すると目の前に二階建てで四部屋のみのアパート現れる。

「…これは何とも風格のあるアパートだね」

「築二十年は堅いね」

刃が気を使った言い方をしても、次の瞬間には小桃の発言がそれを台無しにする。アパートは全体が白く塗られたモルタル式だが、塗装があちこち剥けていて、全体的にくたびれた感じが漂っていた。鵜達がアパートに近づくと、一階の部屋から女の子の明るい声が聞こえてきた。

「おい、莓、お前が欲しがってた靴を買ってきてやったぞ」

「わあい！ お姉ちゃん、ありがとう！」

鵜達が正面のガラス戸から中を覗くと、紅い髪を小さなポニーテールにしている幼稚園児くらいの少女が、林檎からもらった靴をもって小躍りしていた。

「母さん、バイト代出たからさ、はい」

林檎はバイト代を丸ごと母親に渡していた。林檎の母は長い赤髪が映える、高校生の娘がいるにしては若々しい人だった。

「少しは自分の為にとっておきなさい」

「いいよ、生活苦しいんだから、そんな事は気にしないで」

「いつも苦勞をかけるわね」

林檎の母が済まなそうに言う。鵜たちは夕刻のオレンジ色に染まりながらその様子を覗き見していた。

「林檎さん、素晴らしいのですわ。わたくし感動いたしました」

「紅野さん、実はいい子だったんだな。それと、本当にテレビはな  
いみたいだ」

「なになに？ わたし全然見えないよ！？」

弾かれていた小桃がどうかして中の様子を見ようと無理やり割り込んでくる。

「わ、ちよつと小桃ちゃん、危ない！？」

「きやつ！？」

刃と胡桃の声が上る。小桃はかなりの勢いで脇から突っ込んできて、その衝撃で後の三人は将棋倒しになった。倒れたときの音も声も、部屋の中まで良く聞こえた。

「誰だ！！」

林檎がガラス戸を空けると、目の前にチームメイト達を見て、一瞬声を失う。

「…お前ら、何でこんな所にいる」

「わわ、どうしよう、どうしよう」

「大丈夫よ、わたしに任せて」

小桃が慌てふためいていると、鵜が言って立ち上がった。そして鵜は、刃のみならず、同姓の少女たちまで魅了する滑らかな手つきで、夕日に赤く染まるセミロングの黒髪をかき上げる。一瞬、まったく穢れのない髪が宙を舞い、林檎にはその一本一本まで夕日で赤く輝いて見えたような気がした。そんな幻想的とも言える雰囲気を作ってから鵜は言った。

「ちよつとそこまで買い物に」

「うそつけ！！」

林檎が全力で否定したすぐ後に、林檎の母が現れる。

「あら、どなた？」

「母さん、あたしの友達だよ。ちょっと前に話した例の」

「ああ、一緒に闘食杯に出るって言う。せつかくだから皆お上がりなさいな」

林檎の母は、いきなり現れた鶇たちにさしたる疑問も抱かずに、それどころか娘の友人の来訪を喜んでいた。

鶇たちは八畳一間にキッチンがあるだけの質素な部屋に招待された。皆が畳の上に座って真四角のテーブルを囲むと、すぐにお茶が出て来た。そのタイミングで林檎が言った。

「どういう事なんだ？ あたしの後をつけていたのか？」

「さつき言った通りよ」

「明らかに嘘だろ！！ 言っておくが、この辺りには個人経営のスーパーが二軒あるだけだ。お前が買い物をするようなものなんてどこにもない！」

「今夜のおかずにホウレン草の御浸しを作ろうと思って、それを買いに来たのよ」

「あくまでそれを貫き通すつもりか、いい度胸してんな、鶇」

「あの、わたしと胡桃ちゃんがね、林檎ちゃんっていつも何してるのかなって思ってた、それで鶇ちゃんが一緒に探ってくれたの」

小桃が言つと、林檎は大体のことを理解することが出来た。

「そういう事か。だったら、最初からそう言えばよかったのに」

「ここは笑いを取って和やかな雰囲気を作った方がいいと判断したわ」

「効果はどうあれ、その努力は認めるよ……」

それから少女たちは和やかな雰囲気になり、皆すっかりくつろいでいた。林檎はお茶を一口のみ、一息ついてから言った。

「見ての通りの貧乏暮らしさ。いつも小桃と胡桃の誘いを断るのは、金も時間もないからなんだ。悪いと思ってるよ」

「そんな、林檎ちゃんが謝る事じゃないよ」

「そうですね。むしろわたしたちの方こそ、林檎さんの事を何も考えずにお誘いしてしまって申し訳ないと思います」

「それは氣を使いすぎだ」

刃は部屋の様子を一通り見た後に言った。

「生活はかなり苦しそうだね。お父さんはいないの？」

「親父はずっと昔に有り金全部持って蒸発しちゃってさ。それから母さんが女で一つであたし等を育ててくれた。確かに生活は苦しいけど、貧乏も悪い事ばかりじゃない。本当の幸せって言うのは、苦労の中から掴み取るって事が分かったからな」

林檎の言葉に、他のメンバーは目の覚めるような思いがした。

「あたしを愛してくれる母さんと、可愛い妹がいれば十分だ。金もない、テレビもない、好きなものも食べられない。それでも胸を張って言える。あたしは幸せだ」

貧乏で苦労しているはずの林檎の姿は、少女たちの目に誰よりも力強く輝いていた。

帰りのバスの中、胡桃と刃が先に下りて、後に残った小桃と鶯は並んで席に座っていた。その頃にはすっかり夜の帳が下りていた。

「鶯ちゃん、ありがとう」

「何でお礼なんて言うの？」

「だって鶯ちゃんのお蔭で、林檎ちゃんともっと仲良くなれたもん。あのまま林檎ちゃんを疑っていたら、その内に良くない事になっていたかもしれない。鶯ちゃんはそれを心配してくれていたんだよね」

「…小桃は友達思いね。わたしはそんな事はまったく考えていないわ。チームワークが乱れるのは困るのよ。沙耶子を倒すまでは、貴方達にはチームとしていてもらわなければ、ただそれだけの事よ」

「嘘だよ。こうして一緒にいるだけでも、鶯ちゃんの優しさが伝わってくるよ」

「それは貴方の勘違いよ」

鶯は小桃から顔を背け、バスのブザーを押して立ち上がる。

「わたしはここだから、さようなら」

小桃は気になってバスを降りた鶯の姿を目で追っていた。鶯が街

頭の下を通ったとき、少しだけその顔が見えた。いつも無面相な鵜が、胸を打つような悲しみに沈んでいた。

「鵜ちゃん……」

どうして鵜がそんな顔をするのか、小桃にはその理由は皆目見当もつかなかった。ただ、鵜の悲しい姿だけが深く印象に残った。

それでも胸を張って言える・・・終わり

## 第七話 底にあるものは同じさ

「予選突破、おめでとうございます」

「やった〜。お祝いしなきゃだね。皆でケーキビュッフェに行こうよ」

家庭科室で小桃と胡桃が手を叩いて喜んでいた。そこに林檎が割り込んできて言った。

「待て待て、まるで苦難に打ち勝ったかのようなその達成感は何だ！？」

「だって、闘食杯出場決定だよ」

「あたしたちは何にもしてないぞ！」

「地方の闘食家はそれ程少ないと言っことね」

鵜が言った。鵜のチームは予選なしで栃木代表として闘食杯への出場が決定していた。

「東京や神奈川では、予選でも甲子園並みのトーナメントが行われるわ。地方から闘食杯に出たチームは、大抵はひとたまりもなくやられてしまう。何はともあれ、闘食杯への出場は成ったわ」

「チーム名とか決めたのか？」

「明凜館高校で登録してあるわ」

「そのまんまかよ」

「でも、学校の名前で大会に出るとか、青春の1ページって感じだよね」

小桃がはしゃいで林檎に言うと、少しはなれた席に座っていた刃がぼそりと口にした。

「大食いに賭ける女子高生の青春か、絵にならないなあ」

「何か言ったか！」

「い、いえ、僕は何も…」

「ではお祝いに、皆さんでケーキを食べにいきましょう」

「胡桃、話を急に戻すな」

「賛成、行こう行こう」

「お前らケーキが食いたいただけだろ！」

林檎が小桃と胡桃の二人に息巻いていると、刃が手を上げる。

「二人とも、ちよつといいかな」

「はい、刃様、なにかありませんか？」

「メイプルハニーはケーキビュッフェじゃなくて、普通のケーキ屋さんになつたらしいよ」

『えええっ！！？』

衝撃的な事実を突きつけられ小桃と胡桃が同時に驚愕した。さらに胡桃は立ち上がり、悲しみにくれた瞳で何もなし中空を見つめる。その姿は冷たい風が吹きつけて悲しみを誘う音楽が流れてきそうな程の悲愴に満ちていた。

「そんな、どうして……」

胡桃は崩れ落ちるように再び椅子に座り、机の上に突つ伏して身体を震わせた。

「胡桃ちゃん！？　そこまでショック受けることないでしょ！？」

「おい、泣いてるぞ……」

「ケーキは胡桃にとって、命を繋ぐ食べ物だから仕方がないわ」

「いや、それ色々間違ってるからな」

冷静に妙な事を口走る鶇に、林檎は少し引きつった顔になって言った。

「あゝあ、わたしと胡桃ちゃんのお気に入りビュッフェって、なんで普通に普通のお店になっちゃうんだろっ」

小桃が残念そうに言うと、胡桃が起き上がってハンカチで涙を拭いた。

「くすん。そうですわね。二人で三ヶ月も通っていると、大抵は別のお店になつていますわね。不思議なのですわ」

「わたしたち呪われてるのかなあ」

「それ君たちのせいだからね。自覚しようね」

いつも胡桃と小桃に付き添っていた刃は、胡桃と小桃を恐れてい

た数多くの店員の青ざめた顔を思い出し、彼らを悼んだ。

「真名上君も私たちが呪われていると思うんだね。やっぱりそうなんだ……」

「恐ろしい事ですわ。近いうちに二人でお払いをして頂きましょう」「うん、それは名案だね。いつにしようか」

「駄目だ、この二人には何を言っても通じない……」

刃が今まで何度となく挑戦してきた幼馴染の少女たちへの意思の疎通は、いつのもように失敗に終わった。

「ビュツフェはなくなっただけで、とても美味しいケーキを作ると聞いたわ。おそらくこの前の闘食部隊の一件で、普通の材料が手に入らなくなっただけで、イーストフードカンパニーの影響がない個人生産している材料でケーキを作っているのだと思うわ」

鶇が言っていると、それを聞いた胡桃は涙を振り払って復活を遂げる。

「そういう事ならば、すぐに賞味しなくてはいけませんわ！」

胡桃はiフォンを出して電話をした。

「あ、爺や、わたしがよく通っているメイプルハニーのケーキを買ってきて下さいな。学校の家庭科室までお願いしますわね」

胡桃はそれだけ言って電話を切った。そこへすかさず林檎が突っ込む。

「爺やって誰だ!？」

「爺やは爺やですわ。わたくしがずっと小さい頃から身の回りのお世話をしてくれていますの」

「胡桃ちゃんのバトラーさんだよ」

「バトラーって、胡桃はどんだけのお嬢様なんだ……」

それから間もなくして、年老いたバトラーが家庭科室に現れ、大きなケーキの箱を置いていった。

「ずいぶん大きい箱だね……」

刃はテーブルの上におかれた白い箱の異様な大きさに圧倒された。「みなさんで頂きましょう」

胡桃が箱のリボンと包装を取って箱を開けると、予想外のものが

中から出てきたので刃は思わず声を上げる。

「デコレーションケーキ!? しかも一番大きいサイズ!？」

「景気付けには丁度いいな。家庭科室だから包丁くらいあるだろ」

「わたし探してくる」

小桃がそこいらを探して包丁を見つけてくると、柄の方を刃に差し出した。

「真名上君、よろしくね」

「いや、あの、君たちは疑問に思わないのかい? 誰の誕生日でもないのに、こんな巨大なデコレーションケーキが出て来たんだよ」

「胡桃ちゃんと一緒にケーキ食えるときは、これくらい普通だよな」

「小桃さんと一緒の時は、よく買いますわよね」

「ちまちましたケーキなんて食っても、あたしの胃袋は満足しない」

「真名上君、早く切って」

刃は少女達からの波状攻撃に、最後は鵜の面倒だと言わんばかりの命令を受け、このメンバーの中において常識に囚われた自身に後悔しながらケーキを切らされた。

「面倒だから五等分にしろよ」

「僕はこんな巨大なケーキ、五分の一も食べられないよ……」

「男の癖に、女みたいに小食な奴だな」

「じゃあ君たちは何なの!？」

間もなくほとんど四等分に近い大きさのデコレーションケーキが皿の上に置かれる。少女達はそれを当たり前のように食べ、しばらくはケーキの美味しさに感動する声で家庭科室が満ちた。やがてそれが落ち着いてくると、鵜がケーキを食べる手を止めて言った。

「闘食杯の本選は3日後に始まるわ。場所は東京ドーム、8チーム出場で、日に一回戦ずつ行い、休息期間の中日も一日入るから、決勝までいくとすれば六日かかるわ」

「それじゃあ、学校を休まなきゃいけないな」

「それは学校側と交渉してあるから問題ない」

「準備万端というわけか、流石は鵜だ」

「皆、頼りにしているわ。頑張らましよう」

「おう、この林檎様にまかせておけ！」

「わたしは応援しか出来ないけど……」

「よく分かりませんが、皆さん頑張ってください」

「お前も頑張るんだよ！」

思わず声を荒げた林檎だが、胡桃はケーキを食べる事に集中して聞いていなかった。

「やばい、少し不安になってきたぞ……」

「大丈夫、問題ないわ」

鶯は林檎に確信を持って言った。彼女はチームが持っている底力を知っていた。何せ鶯自身が作ったチームなのだから。

鶯達がケーキを食べていた頃、新宿区にあるホテルの五十階の一室で、桜子が二つの駄菓子を片方ずつの手に持って真剣に見比べていた。

「おい、桜子さーんって、何やってんの？」

桜子が入ってきた彩には目もくれずに、駄菓子を交互に見る。

「桜子さん。ねえってば！」

「うるさいわね、今大切な勝負の最中なんだから、邪魔しないで」

「勝負って、駄菓子見つめてるようにしか見えないんだけど」

「物心付いた頃から駄菓子を食べ続けて一八年、私が選ぶ駄菓子の王者を決める戦いよ。ブラックスパークは彗星のように現れた人気者、対するきび団子は深い伝統と精神性を持つ実力派よ」

「超高級ホテルの一室でやる事じゃないね……」

彩はベッドの上に積んである白い箱を開けて中の細長い袋を一つ取り出す。

「また大人買いしてる。……なにこれお餅？　なかなか美味しいわ、この柑橘系の香りがなんとも」

「また勝手に食べてる！？」

「いいじゃん、こんなに沢山あるんだからさ。それで、王様はどう

「ち？」

「難しいわね…。人気だけならブラックスパークの方が圧倒的なんだけど、きび団子の持つ奥底にある伝統という壁は越えられないわ」  
「あ、これきび団子なのに黍きびが入ってないじゃん。偽者だ」

「わたしの好きな駄菓子にけちを付けるんじゃない。三十円のお菓子を本物の黍なんて入れられる訳ないでしょ。味を似せているのよ。それと、はっきり言って本物の黍団子よりも美味しいわ」

「はいはい、桜子さんは本当に駄菓子が好きだねえ」

「駄菓子は日本が誇る素晴らしい食文化よ」

「そんな事言うのは後にも先にも桜子さんだけだろうね」

それから彩は、箱からもう一つきび団子を取り出して食べながら言った。

「桜子さん、もうすぐ闘食杯だよ。コンディションは大丈夫なの？」

「問題ないわ。それよりも、今はこの勝負を決める方が大切よ」

「いやいや、試合の方が絶対大切だから」

「そう言えば、闘食杯に栃木から一チーム出てくるそうね」

「それならもうチェック済みだよ。明凜館高校でチームのメンバーはほとんど女子だって。うちの闘食家をやったのって、多分この子たちだよ」

「もしそうだったら、今年の闘食杯は嵐が起こるかもね」

それから桜子は二つの駄菓子に集中して、彩は桜子が相手にしてくれないので溜息をついて出て行こうとした。その時、桜子が手に持っていたものを放り出し、全力で駆けてきてで彩の腕を掴む。

「その手に持っているものを置いていきなさい！」

「あちゃ、ばれた」

「あんたは平然と箱ごと持っていくな！」

「沢山あるから一箱くらい平気かなと思ってさ」

「分かるに決まってるでしょ！」

桜子は彩を部屋から追い出し、ベッドに腰を下ろしてきび団子をかじった。

「……明凜館って、あの子が通ってる学校だわ。まあ、闘食が出来るような子じゃないけれど……万が一にも出てきたら強敵になるわね」

桜子は独り言の後、最後に喧嘩別れをした妹の顔を思い出していた。

そして二日経った。この日の天気は快晴で、イベントの開催には最高の一日となった。鶉たちはこの日から東京ドームに訪れていた。

ドームの周囲には特設の出店がひしめきあつ。屋台もあれば、プレハブ小屋で小規模な食堂を開いている店もあった。面白いのがどの店にも賞金付きの特大グルメがあつて、さらに闘食での決闘も認められていた。決闘をする場合は負けた方は勝った方の料金まで支払い、店側は勝者に賞金を与えるというルールになっていた。

立ち並ぶ店の間を、林檎と小桃が歩いていた。

「うーん、迷うな。どこの店を制覇してやるかな」

「お店によって、賞金が違うんだね」

「そうかい。だったら、狙うのは賞金が高いところだな」

林檎が店を物色していると、急に近くで騒ぎが起った。

「おう、てめえ！ 今この俺を指差して笑ったな！」

「そ、そんな、笑ってなんていませんよ。いい体格をしていたもので、すごいなと思って……」

何かと思つて林檎が振り向くと、角刈りでジャージを着た巨躯の男が、観光客らしい男の子二人を睨んでいた。二人共痩せ型で一人は眼鏡をかけていて、見るからに草食男子といった風貌だった。

「指を差したことは謝ります。すいませんでした」

「いいや、我慢ならねえ。そうだ、闘食で勝負しろや。俺様に勝ったら許してやるぜ」

「そんな無茶な……」

「ああん？ 男なら売られた喧嘩は買いやがれ！」

大男がメガネをかけた男の子の襟首を掴んで引き上げる。もう一人の連れの方は、オロオロするばかりだった。それを見ていた林檎と小桃は、傍若無人な大男の態度に憤った。

「あれって、恐喝だよな」

「だな。しょうがない、助けてやるか」

林檎が出て行こうとしたその時だった。辺りが急に騒然となる。その少女が歩いてくる姿を目撃した者は自分の目を疑ったり、見とれたりした。ファンにとっては垂涎たる状況であった。

唐突に現れた少女は、草食男子を脅している大男に近づいて言った。

「あんた自信あるんだ」

「おうよ、俺様に闘食で敵う奴なんて……」

大男はその少女の姿を見ると、凍ったように固まって、掴んでいた眼鏡の男の子を手放した。草食男子二人の方も、脅されていた事など忘れて、その少女に見とれる。大男が近くの店の壁に張っているスポーツドリンクの宣伝ポスターを見る。そこに写っている目の覚めるような笑みを浮かべている少女は、目の前にいる少女と同じ姿をしていた。

「お、お、お前は……」

「彩ちゃん、サイン下さい!!」

小桃が色紙を持って割り込んでくる。いきなり突撃してきた少女に、大男も草食男子二人もあっけに取られた。

「あ、ああ、今取り込み中だから、後でね」

「おい、小桃!　いくらなんでも空気読めなすぎだ!」

「ごめんなさい。だって、いきなり彩ちゃんが目の前に現れるんだもん!」

身体が勝手に動いちゃった!」

「あはは、変な子ね。ま、気を取り直してつと」

彩は大男に向かって言った。

「そんなに自信があるなら、わたしが勝負してあげるわよ」

「面白い。アイドル闘食家と勝負出来るなんて、滅多にない機会だぜ。だが、ただ勝負するだけじゃつまらんな」

「じゃあ、あんたが勝ったら何でも言う事聞いてあげる」

「なに！！？ 言ったな、負けて冗談でしたじゃ済まないぜ」

男は今にも涎をたらしそうなだらしない顔で言った。その時、彩はほんの一瞬だが、獲物を捕えた蜘蛛を思わせるような、異様で攻撃的な笑みを浮かべる。林檎はそれを見逃さなかった。

「あの男、地雷を踏んだな」

「え？ 林檎ちゃん、どういう事？」

「アイドルなんてただのおまけだ。あいつは狼だ」

楠木彩が現れたという噂を聞いて、辺りにどんどん人が集まってきた。

「勝負の品目は、あんたが決めていいよ」

「よし、じゃあ得意の丼物でいかせてもおう。そこの牛丼屋で勝負だ」

「じゃあ、行きましょう」

有名チェーン店の味野屋の牛丼の特設店舗に二人は入っていった。

「あいつの実力をじっくりと見せてもらおう」

林檎と小桃に彩を見に集まってきた人々も店に入る。カウンターに座った彩と大男の周りには人だかりが出来て、もはや一大イベントと言ってもいいくらいの盛況ぶりだった。

「勝負の時間は無制限、先にギブアップした方が負け。それにもう一つ、わたしの流儀を加えさせてもらおう」

「お前の流儀だと？」

「注文した物は必ず完食する事、いいわね」

「何だ、そんな事か。何の問題もない」

「それじゃあ、勝負よ」

彩が言うと同時に、牛丼並盛が二人の前に運ばれてくる。その瞬間に彩は箸を素早く取り、丼を持ち上げた。丼のせいで食べている姿は良く見えないが、彼女は二分もかからずに牛丼並盛を食べ終え

た。

「はい、一丁上がり、次」

大男の方が彩の早食いに驚愕し、自分も食べるスピードを上げる。自然、男は彩を追う形になった。彩は二杯目から三分程度の時間をかけて食べるようになった。二人の差はわずかなものだが、常に男の追う側という状況は変わらなかった。一見すると良い勝負で、ギヤラリーはこそつて彩を応援した。

「彩ちゃん、がんばれー、負けるなー」

「えげつないな……」

小桃は隣で眉を顰<sup>ひそ</sup>めている林檎を見て首を傾げた。

「林檎ちゃん、どうしたの？」

「小桃はわからないのか？ あいつはわざと相手に合わせて食べているんだ。その気になれば、簡単にぶつちぎれるって言うのに」

小桃には林檎の言っている意味が分からなかったが、やがて三杯、四杯と勝負が進んでいくうちに、その意味が知れた。五杯目辺りから大男の方が苦しい表情を浮かべる。彩は平然と七杯目まで食べて、大男も負けじと七杯目を完食した。そして男は、何でも言う事を聞くと言った彩への未練から、限界にも関わらず八杯目の牛丼を頼んだ。もしかしたらこれで彩が参ったと言うかもしれないという男の淡い期待はあっさりと叩き潰される。彩は八杯目の牛丼をさつさと口に運んで食べ終えた。

「八杯目、完食！」

彩が食べ終えた丼を、積みあがった空丼の頂上に叩きつけるように置いた。彩の圧倒的な雰囲気、応援していたギヤラリーはいつの間にか静まり返っていたので、その時に起こった高い音がきんと響く。大男の方は手をつけていない八杯目の牛丼を前にして動かず、箸を持つ手が震えていた。

「あれ、どうしたの？ もうお終い？」

「うぐ、ぬぐおっ」

大男は目の前の牛丼を見ただけで嫌気が差し、吐きそうになって

いた。

「わたしが言った事忘れてないわよね。ちゃんと全部食べなさいよ」  
「む、無理だ……」

男が言うと、彩は突然、箸を思いつきりカウンターに叩き付けて立ち上がった。大男もギャラリーもぎよつとして彩を見つめる。

「ふざけんじゃないよ、わたしの前で食べ物を残すな！！ 闘食家なら、頼んだものは責任もって食べなさいよ！！」

その時、彩が大男を見下ろす目は、恐ろしい憎悪と蔑みに満ちていた。男は蛇に睨まれた蛙の如く縮こまってしまった。

「か、勘弁してくれ……」

「世の中には食べ物がなくて飢え死にする人だっているのよ。それなのに、闘食家が食べ物を残すなんて、許される事じゃない。ねえ、皆もそう思うでしょ？」

彩が言うと、集まっていた彩のファンは当然賛同した。そして『食べ』コールが始まった。大男は冷や汗をかきながら、恥辱に震える。

『食べ！ 食べ！ 食べ！……』

「そうだ、彩ちゃんの言う通りだよ、ちゃんと食べる」

「よせ小桃、お前まで乗せられるな」

「だって、彩ちゃんの言ってる事は正しいよ」

「そうかもしれないが、あいつは故意にこの状況に持っていったんだ。それに……」

ギャラリーがコールして大男を攻める中、林檎は彩の前に出てきて言った。

「もうそれくらいで止めてやれよ。残すのがそんなに気にいらないなら、あたしが食ってやるよ。意地汚いと言われようが関係ない。食い物を粗末にされるのは見るに耐えないからな」

林檎は大男の前にある牛丼を取り上げ、箸を持って素早く掻きこんだ。何と林檎は一分とちよつとで牛丼一杯を食べてしまった。ギャラリーから感嘆の声が漏れる。それだけで彩は林檎の闘食家とし

ての実力を垣間見た。

「あんた……」

「これで満足したか？」

「林檎ちゃん、お腹が空いてるなら素直にそう言えばいいのに」

「ちがー！うー！！ 話がややこしくなるから小桃は黙ってる！」

いきなり怒鳴られて、小桃は涙を浮かべたが、林檎は見なかった事にして話を続ける。

「楠木彩だったな。お前の闘食を見て分かったことがある。お前は食い物に対してかなりの執着を持っている。食い物で苦勞してるはずだ。だから食い物を残したこいつに対して、あんなに怒ったんだ」「ふん、田舎者のあんたに、わたしの何が分かるって言うのよ」

「田舎者で悪かったな。一つだけ言うておく、あたしとあんた、底にあるものは同じさ」

それを聞くと、彩は人を食うような笑みを浮かべ、頭一つ分小さい林檎を見下げて言った。

「もしそれが本当なら、闘食杯でわたしの所まで来てみなさいよ」

「見てろよ、必ず……」

「彩ちゃん、ほっぺにご飯粒が」

不意に小桃がハンカチで彩の頬に付いた飯粒を拭った。

「あ、ありがとう」

「それと、サインお願いします」

小桃が色紙を出すと、彩は周りに集まっているファンを見て苦笑いする。

「ごめん、ちよつと今は無理よ」

彩はそつと小桃の制服のポケットに何かを差し込んでから小声で囁いた。

「後でこの携帯の番号に電話して」

その後、彩はファンの開けた道を通って、牛井屋から出て行った。

「うっつ、彩ちゃん可愛いなあ」

「小桃……」

「何、林檎ちゃん？」

「お前をエアクラッシャーと呼んでやろう」

「エアクラッシャー？ 何それ？ あ、それよりも見てよ。彩ちゃん  
のほっぺに付いてたご飯粒、もう一生の宝物だよ」

「そんなもん、さつさと捨てる！！」

「いやだよ、そんな勿体無い事できないよ」

「まったくお前は…まあいいや、とりあえず鵜のところに戻るぞ」

底にあるものは同じさ・・・終わり

**第八話　これが華喰沙耶子だ！！！（前書き）**

ここからは闘食がメインになっていくので、コメディーにも増して、シリアスな場面が多くなってきます。

## 第八話　これが華喰沙耶子だ!!!

「いよいよ闘食杯の始まりが近づいてきた！　東京ドームは超満員、熱狂に包まれている！　今年はどのような激闘が繰り広げられるのか!!!」

闘食杯が行われるこの日、試合が近づくと、ドーム内の壁面にいくつか設置された巨大な液晶スクリーンからMCの声があがった。

「おい、まじか！？　こんなに観客がいるのか！？」

「闘食は今やプロレスにも匹敵するエンターテイメントよ」

「イーストフードカンパニーの強力なプロモーションで、その人気は上がる一方なんだよ。それにしても、僕までここにいていいのかな？」

想像もしていなかった観客の多さに林檎は驚くばかり、刃は自分の存在が場違いな気がして居ずらそうにしていた。その横に胡桃と小桃がいて、胡桃はあたりを見回しては不思議そうに首を傾げていた。

「小桃さん、どうしてこんなに多くの人が集まっているのです？」

「みんな試合を見に来てるんだよ」

「何か楽しい事があるのですね」

「まあ、そんなところ」

「では、わたくし達もあそこへ行つて見学しましょう」

胡桃が小桃の手を引っ張って連れて行くとする。小桃は慌てて逆に手を引いた。

「だ、だ、だ、駄目だよ！？　わたしたちも試合に出るんだから！」

「そうなのですか！？　わたくし運動は苦手ですのに……」

「胡桃ちゃん、今頃そんなに驚かないで……」

流石の小桃も胡桃の頂上のな惚けぶりにたじろいでいた。

「刃は胡桃がどうか行かないように、しっかり見張ってるよ」

「僕をここに呼んだのはそういう理由か」

「それ以外に何があるんだ」

「そうだね、それ以外にないよね。僕の思慮が浅すぎたよ、ハハハ……」

林檎に言われ、刃は大会の間中、胡桃と一緒にいなければならな  
いと思うと、乾いた笑いが出て来た。

やがてMCからチームの紹介が始まる。まずは鵜たちにスポット  
ライトが集中した。すると、制服姿の女子高生の登場に観客達は嬉  
々として拍手を送った。

「さあ、チームの紹介をするぞ！ 活目せよ！ まず最初に紹介す  
るチームは、闘食杯へは初参戦、栃木代表の明凜館高校だ！ 何と  
メンバーは全員女子高生！ その力は未知数だ！ どんな戦いを見  
せてくれるのか、今から楽しみなところだ！ そしてお次は……」

次のチームにライトが移動すると、観客だけでなく鵜達まで少し  
驚かされた。光の中に白いセーラー服姿の少女三人が立っていた。

「驚くなかれ！ またも女子高生チームの登場だ！ 福島代表、い  
わき青海高校！ 誰もが忘れ得ぬ大震災の地から、奇跡の参戦だ！  
彼女らの戦う姿で、被災地の人々に少しでも勇気を与えて頂きた  
い！」

スポットライトに照らされる三人の東北美少女達、一人は浜崎空  
と言つて、この場にいる全ての闘食家の中で最も背が小さいはしつ  
こそうな女の子で、そんなに長くない黒髪を後ろで二つに結わえ、  
習字の筆のような可愛らしい小さなテールまじこがのみにしていた。真ん中の背  
が一番高く長い黒髪の少女は増子風美まじこがのみと言い、顔立ちがおつとりと  
しているがどこか品があり、見るからにお嬢様という雰囲気ふんいきが漂う。  
最後の少女は黒髪をポニーテールポニーテールにしている、大きな瞳に鋭い光を  
帯びて気が強そうだが、それにも増して陰に暗いものを持っていい  
た。何人かの感性の鋭い闘食家たちは、彼女から計り知れない悲愴  
を感じていた。その少女の名は西牧海宇にしまみづと言った。

小さな少女、空が歓声とどろく試合会場を見渡して思わずはしゃ

いで風美に言った。

「うわゝ、すごいな！ あたしたち、こんな所まで来たんだな！」

「うん、びっくりだね」

「あたし少しわくわくしてきた」

「空ちゃん、あんまり張り切りすぎないでね」

風美はそう言った時、はっとして海宇の顔色を伺った。

「海宇ちゃんごめんね、はしゃいだりしちゃいけないよね」

「いいのよ。ここまで来れたんだから、はしゃいで当然だよ」

この時、観客席の一部からいわき青海高校の学生たちの声があがった。みんなが『海宇ちゃん頑張れ！』と声を張り上げていた。それを聞いたMCは言った。

「おおっと、これは東北の多くの友も応援に駆けつけているようです。いわき青海高校には是非とも頑張つて欲しいところだ！」

その後も次々とチームが紹介されていく。そして最後に残った二チームが紹介されようというとき、スポットライトが彼らを照らし出した瞬間に、観客は待つてましたとばかりに騒ぎ出し、爆風のような声援がドーム内に吹き荒れた。

「いよいよ残るは優勝候補の二チーム、凄まじい声援だ！ 七番目のチームは、神奈川代表、龍餓<sup>りゅうが</sup>！」

歓声の嵐の中で、胡桃と小桃はチーム龍餓の中で最も脚光を浴びている女性に見とれた。観客に向かって手を振る彼女の碧眼はスポットライトの光を吸い込んで宝石のように輝き、金系のように光沢のあるブロンドを三つ編みにして、白いドレスを身にまとっている。背はそれなりに高く胸は豊かに張り出していて、その立ち居振る舞いはエレガントだった。

「すごく綺麗な人だ」

「本当ですわね。きつと、外国の貴族のご令嬢に違いありませんわ」

「あれはエイミ・リファールだよ！ 闘食家だけど女優もやっていて、映画によく出てるんだ。僕大ファンなんだ！」

刃がエイミを見つめていると、たまたま彼女と目が合って微笑ま

れた。刃の心臓の辺りに熱い衝撃が走る。

「うう、生エイミが見られるなんて、僕は何て幸せ者なんだ……」

刃が感動に胸を震わせていると、いきなり太腿に痛みが走った。

「いたっ！？　なに、胡桃ちゃん！？　何でつねるの！？」

「刃様がだらしない顔をしているからですわ」

胡桃は愛らしい顔の頬を膨らませて怒っていた。その横で林檎はエイミの姿を見ながら言った。

「鶯、あの女は何者だ？」

「日本在住のフランス人で、名前はエイミ・リファール。またの名を、甘味の女神」

「甘味の女神！？」

「そうよ。甘味勝負において、彼女の右に出るものはいないわ。闘食女王の沙耶子ですら、甘味勝負ではエイミに負け越している」

「そんなに凄い奴なのか……」

「彼女だけではないわ。右側にいる眼鏡をかけたスーツ姿の痩せた男の名は崔諭烏飛<sup>ちえゆい</sup>、韓国人で辛味料理にはめっぽう強くて、闘食の世界では辛味太公<sup>からみたいこう</sup>と呼ばれている。そして三人目のあの男……」

チーム龍餓最後の一人は、輝きを放つように笑顔を見せる美丈夫だった。黒いＴシャツの上に革ジャンを着て、ズボンも皮製のものをはいている。Ｔシャツ越しに見える盛り上がりから、鍛え上げられた肉体を持つことが容易に分かった。

「彼の名は龍田雅樹<sup>たつたまさき</sup>、チーム龍餓のリーダーよ。この日本では、彼以上のバランス型の闘食家はいないわ。勝負の時間が長いほどに力を発揮する。長時間ものを食べ続ける彼の姿から、いつからかインフィニティ・イーターという渾名が付いたわ」

「やばそうな奴ばかりだな……」

「龍餓は要注意チームその一よ」

そして、最後のチームにスポットライトが移動した。

「皆さんもお待ちかね、いよいよ最後のチームの紹介だ！　大会三連覇を狙う、史上最強の闘食チーム、イースト・イーターズ……」

スポットライトが数段高く設置されたステージの上を照らす。そこに彩が手を振りながら出てくると、ドームは瞬く間に熱狂的なフアンの声援に包まれた。

「きゃー、彩ちゃん、すてきっ！」

「小桃のアホ！ 敵に声援を送る奴があるか！」

「あうっ、だつて……」

彩はステージの上から林檎に怒られている小桃の姿に気付いた。

「おや、あれに見えるは、前にサインを求めてきた女の子じゃないか。あの子も出場選手だったんだ。おい！」

小桃は彩が手を振っているのを見ると、一気にテンションが上がった。

「彩ちゃんがこっちに向かって手振ってる！！？」

小桃は目の前の林檎を全力で横に押しのけて手を振り返す。

「うわっ！？」

予想外の力で投げ出された林檎は、人口芝の上にダイビングヘッドした。

「小桃、お前なあ……」

林檎が起き上がり、怒り心頭になって近づいた時、喜悦を浮かべて手を振っていた小桃の顔つきが急に硬くなる。上から見ていた彩には、小桃の様子がおかしいのがはっきりと見えた。

「あれ、何？ 急に後退りなんてしちゃって、もしかして嫌われた！？」

「わたしが見れたからよ」

二番手に現れた桜子が、ステージの上から小桃を見つめた。

「まさか、小桃がこんな所に姿を現すなんて……」

「何？ 知り合い？」

「妹よ」

桜子を見る小桃の表情は強張り怒りに燃えていた。それは普段の彼女からは想像も出来ない姿だった。周りにいる仲間は戸惑った。

「おい、小桃、どうしたって言うんだ？」

「あれは桜子さんではありませんか。小桃さんのお姉様ですわ」

胡桃が言っと、鵜と林檎の視線が小桃に集まった。

「名前を聞いた時からそうじゃないかとは思っていたわ。あの人の名は春園桜子<sup>はるのさくらこ</sup>、香辛<sup>かうしん</sup>の女帝という渾名で呼ばれている。その名が示す通り、辛味料理に対して圧倒的なアドバンテージを持っているわ」

「小桃と同じ嗜好じゃないか、さすがは姉妹だな」

「やめて、あんな人お姉ちゃんなんかじゃない！」

「小桃ちゃん、まだあの時のこと怒ってるんだね」

「当たり前だよ！ みんなの期待を裏切って闘食家なんかになって！」

小桃は刃に怒鳴りつけるように言った。その後すぐにすまなそうな顔になる。

「みんな、怒鳴ったりしてごめん……」

「事情は聞かない方がよさそうね」

「いよいよ最後の人が出てきますわ」

胡桃がまったく空気を読まずに言った。だが、今回はそれが役に立った。小桃への疑念はそれで一旦は払拭され、全員が女王の登場に注目する。

煌々と光の降るステージの上に、栗色のボブにソバージュをかけた足の長い女性出て来た。彼女は上が白いブラウスに下は黒いタイトスカートという、スーツを脱ぎすてて身軽になったOLと言った風貌で、この姿は沙耶子のもう一つの顔である、大企業の秘書という仕事を象徴するものでもあった。整端な顔にある目は切り長で鋭い眼光を放ち、薄笑いを浮かべる瑞々しい唇には赤い口紅を使っている見る者に鮮烈な印象を与える。鵜にとっては忘れ得ぬ姿だった。華喰沙耶子が現れると、さらに会場は沸き立ち、自然に沙耶子コールが始まった。まるでプロレスの大スターが現れたかのような趣<sup>おもむき</sup>がある。

明凜館高校の面々は凄まじい熱狂に圧倒されっぱなしだったが、鵜だけは冷静で、ただステージ上の沙耶子を睨んでいた。勘の鋭い

沙耶子は、すぐにそれに気付いて睨み返す。

「面白そうな子がいるわね。このわたしにガン飛ばしてるわ」

「沙耶姉さん、何か恨まれるような事でもしたんじゃないの？」

「そんなの心当たりがありすぎて、どれがどれやら」

「うあ、罪悪感とかゼロだね」

「恨み辛みなど、所詮は負け組みの戯言よ。そんな事を一々気にしていたら、女王にはなれないわ」

「頼もしいお言葉だねえ」

「あの子達は気をつけた方がいいと思うわ」

「あら、桜子がそんな事を言うなんて珍しいわね」

「あの中に、桜子さんの妹がいるんだよ」

「へえ、例の桜子以上に資質があるって言う」

「小桃が闘食に出てくるとは思えないけど、もし出てきたら厄介な事になるわ。それにあの赤髪のツインテールと、あんたを睨んでる黒髪の子、あの二人も出来るわよ」

「それは楽しみみな事ね。最近弱者ばかりで辟易していたところだから、是非この女王の前に立ちはだかつて欲しいものだわ」

やがてMCがステージに上がり、沙耶子に一言とマイクを渡す。

「よくお聞きなさい！！」

沙耶子の一言で、騒然としていたドーム内が一気に静まり返る。

「我らイースト・イーターズにとって、闘食杯など掃討戦でしかない！ わたしたちのする事と言えば、目の前に現れた獲物を喰らい尽くす事だけよ！」

観客席から沙耶子を称える声が盛り上がるように起こってくる。

林檎は恐ろしいものを見るような顔をして言った。

「なんちゅう自信だ、そこまで言うか！？」

「沙耶子にはそう言うだけの力があるわ」

「とんでもない奴だ……」

また、女王の言葉を聞いていた龍餓の崔<sup>ちえ</sup>が、眼鏡の位置を直しながらリーダーの雅樹に言っていた。

「獲物の中には我々も入っているのかね？」

「入っているだろうな」

「まったく、毎度の事だが不愉快な女だ」

「わたし達が目の前に現れたら、そんな事は言っていられなくなるわよ」

「エイミの言う通りだな。ここところは負けてばかりだが、今回は勝ちにいくぞ」

「雅樹、女王の弱点でも掴んだのかね？」

「まあ、そんな所だ。決勝戦を楽しみにしていてくれ」

観客の盛り上がりが最高潮に達する中で、MCが言った。

「いよいよ一回戦第一試合を開始するぞ！ 最初のカードは、これだ！！」

ドームの壁面にある大液晶画面に文字が現れる。

『明凜館高校 VS 静岡闘食研』

「おおっと、いきなり来たぞ、栃木から来た女子高生軍団の登場だ！ 対するは静岡代表闘食研！」

鷗たちに向かって観客たちの声援が降り注ぐ。それがチーム明凜館高校への感心の高さを表していた。

「試合は十分後に始めるぞ、各チーム共に準備を怠るな！」

鷗は一分ほどで闘食に出るメンバーの順番を決めた。それが終わるのを見計らうように、一人の若者が鷗に声をかけた。

「失礼、僕は青森食土団の村田と言うものですが…」

「何か御用ですか？」

「君たちは栃木代表と聞いたが、地方予選には出ていないね。かといって、明凜館高校なんて名前も聞いた事がない。どうしてシード権を得たのか、仔細を教えてもらえないか」

「地方予選？ そんな話は聞いていないわ」

「予選がある事を知らされずに、いきなりここに来たと言う訳か。主催者側にミスがあったという事かな。何かの間違いとは言え、実に不愉快だ。東日本にいる全ての闘食家が闘食杯を目指し、多くの

チームが脱落して涙を飲んでいると言うのに、君たちのように無名のチームがいきなり本選に来るとは……。まあ、ミスでは仕方があるまい。ほんの僅かでも健闘できるように、せいぜい頑張ってくれたまえ」

男が去ると、林檎が眉を顰めて腑に落ちないという顔をして言った。

「何がどうなってる？ 主催者側のミスってどういう事だ？」

「ミスではないわ。イーストフードカンパニーの中に、わたしたちを引き出したい人がいるのよ。恐らく前に宇都宮へ闘食家を送り込んできた元締めだと思うわ」

「だったら、教えてやろう。あたし達が全員ぶっ倒しましたってな」

そして試合開始の時間になった。

「さあ、いよいよ試合が始まる。だがその前に、闘食杯のルールを説明しておこう。勝負の時間は二十分、ポイント制で行う。メニューを一つ食べ終わるごとに1ポイントが加算され、三人戦い終わって最終的にポイントが多いチームが勝利となる。メニューの中には二つ食べて1ポイントになるものや、一定の量を食べて1ポイントとなるイレギュラーもあるぞ。お次は禁止行為だ。道具の使用はこちらで用意されているもの以外は認められない。食べ物の外観を著しく損なう行為は認められない。食べ物の味を変える行為は認められない。これらの行いがあつたと判断された場合はポイントにならないから注意してくれ。さらに嘔吐またはそれに類する事をしてしまった場合は、マイナス3ポイントのペナルティを受けるぞ。相手チームに対して妨害行為を行った場合は、当然のことだが失格となる。説明は以上だ！ 最初に闘食を行うチームの先鋒は席についてくれ！」

最初に出されるメニューは特大シュークリームだった。明凜館側の先鋒は、もちろん胡桃である。相手チームは筋肉質の巨漢の男だ。後に控えている二人も似たような体格をしていた。

「胡桃ちゃん、行くよ」

「はい、刃様」

胡桃は刃に引率されて席に着いた。向かいのテーブルに相手チームの巨漢が座る。常に相手が正面に見えるので、負けている方はかなりのプレッシャーに襲われる構成だ。

早速、二人のテーブルの上にシュークリームの乗った皿が出て来た。

「胡桃ちゃん、まだ食べちゃ駄目だよ」

「合図があつたら食べていいのですね」

「そうそう」

「そんなほんわかしたお嬢さんで勝負になるのかい？」

「いやあ、僕には何とも」

「おいおい……」

刃の答に巨漢は啞然とした。そんな状況を完全に無視して、五秒前から秒読みが始まり、そしてカウントがゼロとなる。

『READY、GO!!』

女性の音声が言うと同時に、ドーム壁面の巨大液晶スクリーンに二〇分からのカウントダウンが表示され、巨漢の方が猛烈な勢いで食べ始めた。彼の前に次々と新たなシュークリームが投入されていく。一方、胡桃はすまし顔で座っていた。

「何やってんの胡桃ちゃん！？ 早く食べて!!」

「え？ でも、まだ誰にも食べて良いとは言われていませんわ」

「いいよ！ 食べていいよ！ 僕が言っただから！ はい、食べて！」

凄まじい惚けをかます胡桃と、慌てふためく刃の姿を目の前で見せつけられた巨漢の男は、耐え切れずに笑ってしまい口の中の物を嘔き出した。

「おおっとお！？ 静岡闘食研の先鋒、どうした事だ！ いきなり

嘔き出してしまった！ マイナス3ポイントのペナルティだ！」

「ぬお、しまった!!?」

「馬鹿野郎、何やってる!!」

背中に仲間の怒りを受けて、巨漢の男は恨めしそうに胡桃たちを睨んだ。

「貴様ら卑怯だぞ！」

「いや、わざとじゃないんですよ」

「このシュークリーム、とっても美味しいですわ」

最高の間の悪さで胡桃が言うと、男は顔を真っ赤にして、怒りに任せてシュークリームを貪り食った。シュークリームは二つ食べて1ポイントになるので、3ポイントのペナルティはかなりの痛手だ。「ああいう攻め方もあるのね。勉強になるわ」

「何をどう学んだのかは分からんが、鶇には絶対に不可能な技だ」

「いいぞ、胡桃ちゃん、頑張れ！」

そして二〇分が経ち、マイペースに食べ続けた胡桃は十個、相手の男は二十個食べたが、ペナルティがあるので6個分は無効である。ポイントになると明凜館高校が5ポイント、静岡闘食研が7ポイントとなった。それからすぐに中堅戦が始まる。明凜館高校の二番手は林檎だった。

「よし、真打登場だ！」

相手は先ほどの男と同じ様な巨漢だ。林檎は席に着くと、その男の顔をまじまじと見つめた。角刈りに紅いTシャツと短パン姿に、林檎は見覚えがあった。男の方は顔を見られまいと下を向いている。それを小桃が指差した。

「彩ちゃんにこてんぱんにされた人だ！」

「うるさい！ 黙れ小娘！」

男が小桃に向かって怒鳴ると同時にその顔も露見した。

「あんな醜態を晒して、よくこんな所に出て来たわね」

別の方向から彩の声が飛んでくると、男は逆切れした。

「うるせえ！！ 昨日は油断したんだ！ 今日の俺は一味違っぞ！」

「おいおい、敵はこつちだぞ」

「小娘、早食いだけでは闘食では勝ち抜けんぞ」

「それ以上はやめておけ、恥をかくだけだ」

「何だと!？」

「あたしは彩みたいには性格悪くないから、あんな面倒な事はしない、正面からいって叩き潰すだけだ!」

林檎は掌に拳を打ち込み気合十分だ。戦いを前にして高揚する林檎の姿は、目の前の男を圧倒した。

「勝負の品目は太巻きだ! 二人の闘食家の前に、壮観な姿が現れた!」

MCが言つと、長さ一メートルの太巻きがテーブルの上に置かれた。それを十センチ食べることに1ポイントが加算される。

そして勝負が始まる。最初は大騒ぎしていた観客だったが、林檎の闘食を前にして、やがて辺りは静まり返り、MCまで言葉を忘れて呆然とそれを見ていた。林檎は豪快に太巻きにかぶりつき、見る見るうちにその長さが減っていく。相手の方も健闘していたが、試合終了三分前で目の前のプレッシャーに負けて、五〇センチほど残った太巻きを置いた。林檎の方は残り二〇センチ程度を豪快に二口食べては水を飲み、二〇分丁度でテーブルの上には何もなくなっていた。林檎が観客席の方に向かって親指を立てると、割れんばかりの拍手と歓声が沸き起こる。

「ななな、何と!?!? 紅野林檎、二〇分で一メートルの太巻きを食べ切ってしまった!! 今までの太巻きを時間内に食べ切ったのは、前女王の深山瑠璃と、現女王の華喰沙耶子だけだ! 闘食杯史上三人目の快挙! 新たなルーキーの登場に、観客席も沸いている!」

明凜館高校がこれで一五ポイントを得て、相手チームを3ポイント逆転した。無名チームの闘食家がいきなり台頭してきて、各チーム共に騒然となる。

試合を見ていた龍餓の龍田雅樹は言った。

「常務の邪魔をしたのは彼女等で間違いなさそうだな」

「大将の子は何をやってくれるのかしら、楽しみね」

難しい顔をする雅樹とは対照的に、エイミは本当に楽しそうに微

笑を浮かべていた。そこへ神経質な顔の崔が言った。

「どんなに力があつたとしても、準決勝止まりだろう」

「そうね、準決勝からはあれが出てくるものね」

その時、楠木彩は、仲間のところに戻っていく林檎の姿を見ていた。

「なかなかやるじゃん」

「あんと良い勝負じゃない」

「わたしはあんな奴には負けないよ」

彩は桜子に絶対の自信を持って言った。

いよいよ大将戦が始まる。相手チームは今まで以上の大男が出て来た。それと比べると鵜はまるで小動物だ。

「ぬうう、初戦のペナルティがなければ…」

「そんなもの、あつてもなくても変わらないわ」

「このチビ、大した自信だな」

相手の大男が脅すような調子で言っても、鵜はまったく相手にしていなかった。そして、二人の前に大盛りの蕎麦と箸立てが運ばれてくると、秒読みが開始された。

『READY、GO!!』

大男の方は箸で一気に大量の蕎麦を取り、汁に付けて食べた。それを何度か返すと蒸籠の蕎麦がなくなる。男がちらと前を見ると、鵜は何もせずじっと見ていた。そして…

「素人ね」

「何だとお!!?」

「ルールでは、用意された道具以外は使ってはいけない。言い方をかえれば、用意された道具ならどんな使い方をしてもいい」

鵜は素早い手つきで箸立てから四本の箸を取った。それを見た人々は驚いた。

「二刀流!? 鵜は何をするつもりだ!?!」

林檎の問いに答えるように、鵜が華麗な箸捌きを見せる。二つの箸を交互に使う事により、鵜は断間なく蕎麦を食べ続け、男の方が

二つ目を食べ終わる前に、一つ目の蕎麦を完食した。続いて二つ目、まるで昇り竜のように途切れなく鵜の口に蕎麦が運ばれていく。

「鵜ちゃん、すごい……」

「あたしが初めて会ったときも、あんな闘食を見せ付けられた」

「息継ぎはいつしているのでしょうか？」

「さあな……」

胡桃が微妙に的を外れた疑問を口にする。胡桃以外の会場にいる多くの者が鵜の闘食に魅入った。特にその中でも、雅樹が鵜を見る目には特別なものがあつた。

「……同じだ。あの子は、先代の闘食女王と同じ技を使っている」

「あなたが闘食家になるきっかけを作ったって言う憧れの人？」

雅樹はエイミに頷き、青春を謳歌する少年のように瞳を輝かせた。「ああ、前女王の深山瑠璃は、身体は小さいけれど努力と技で女王の座を守り続けた、闘食家の鑑といえる人だ。あの人の闘食は美しかった。それを見て心の底から闘食家になりたいと思わされたものさ」

その時、観客席から驚嘆の声が上る。鵜が相手の大男に対して、1ポイントの差をつけたところだった。男の方も必死に食べてはいるのだが、差は開くばかりだ。

やがて男は六つめの蒸籠を空けたところで勝負を諦めた。同時に鵜も箸を置き、彼女の横には九つの蒸籠が積まれていた。これで明凜館高校は24ポイント、静岡闘食研は18ポイントとなり、勝負は決まった。

「……すごい。これは、とんでもないチームが現れたぞ！！？ 明凜館高校、まさにダークフォースだ！！」

MCの興奮に観客も答えて、辺りにはわかにお祭り騒ぎとなった。

「さすがだな、鵜」

「鵜ちゃん、かつこよかったよ」

「皆がいてくれたから勝てたのよ」

「どうして二人であんなにお蕎麦を食べていたのですか？ 年越し

には幾らなんでも早すぎますわね」

「胡桃ちゃん、勝負してたの、そろそろ理解しようね……」

相変わらず胡桃がおかしな事を言うので、メンバーは笑っていた。  
「ほほう、常務に泡を食わせただけはあるな」

「崔さん、感心している場合じゃないわ。次はわたしたちの番よ」

「最初のメニューはプリンパフェか。君が行って観客を楽しませてやれよ」

「ふふ、そうするわ」

第2試合は龍餓対フード戦隊。埼玉代表のフード戦隊は、赤、青、黄の色分けされた服を着ていて、まずはその見た目で観客を盛り上げていた。

「甘味勝負ならこのイエローにお任せあれ。覚悟してもらいましょう、美しいお嬢さん」

「お互いに頑張りましょうね」

イエローと名乗る小太りの男は、エイミの美しい笑顔を見て照れていた。

やがて一番上に大きなプリンの乗ったパフェが運ばれてきた。

『READY、GO!!』

エイミがパフェを口元にもっていく。そしてスプーンが高速で動き、あれよという間にガラスの容器が空になった。イエローの方はまだ半分以上残っている。それに明凜館高校の面々は衝撃を受けた。  
「早い!? 何が起こったんだ!?!」

「なんか、よく見えなかったね……」

「エイミは甘味においては、スピードと安定性、そして持続力と、非の打ち所のない闘食家になるわ。見た目に似合わず恐ろしい人よ」  
三人が真剣に試合を見ている横で、刃は見とれていた。

「エイミさんは食べてる姿まで美しいな」

「むう」

「何、胡桃ちゃん、何でそんなに睨むの?」

「刃様なんて嫌いです」

「大人の女性に憧れるくらい許してよ……」

刃は胡桃にそつばを向かれてしまった。

試合は続く。十数分後には、大差がついていた。イエローが五杯パフェを食べる間に、エイミは十一杯目に突入、一ポイント差が開くごとに、観客席は沸いた。

「フード戦隊、もう時間がない！ 優勝候補の龍餓相手にこの点差はもはや絶望的か!？」

エイミがさらに杯を一つ空けてそれを観客席に向けて上げると、大喝采が起こった。小桃と林檎も思わず拍手していた。

「みんな楽しそう!」

「闘食家によつて場の雰囲気がこんなに変わるんだな」

そして時間切れ。エイミは十一杯、イエローは五杯のパフェを食べ、龍餓は相手チームに初手から6ポイントもの差をつけた。

「次はわたしの出番か。もはやこれ以上の点差は必要あるまい」

「ああ、俺たちは力を温存させてもらおう」

二番手の崔も、最後に出て来た雅樹も、相手にペースを合わせて料理を食べて、龍餓はリード6ポイントのまま勝利を収め、圧倒的な安定感を見せ付けた。その試合が終わったとき、林檎ははっと気付いて鵜に言った。

「おい、次にあいつらと戦うのつて、あたしらじゃないのか?」

「その通りよ。今頃気付いたのね」

「先鋒が胡桃じゃ大差を付けられるぞ。点差が大きくなったら、らあいつらには勝てない」

「それは大丈夫そうよ」

胡桃はエイミを睨んで対抗意識を燃やしていた。エイミの方は何でそんな風に睨まれるのか分からずに苦笑いを浮かべるばかり、刃は焦って胡桃を諫めていた。

「それよりも問題は他にあるわ」

「何があるつて言うんだ?」

「それはわたしが対処するから、林檎は気にしなくてもいいわ」

「気になるじゃないか、教えろ」

「試合が始まる時になれば分かる」

試合は次々に行われていく。第3試合はいわき青海高校と青森食士団との戦い。

「次はいわき青海高校と青森食士団の試合ですが、いわき青海高校の西牧海宇選手の希望により、東日本大震災の犠牲者に黙祷を捧げたいと思います」

MCの声が響くと、それまで熱狂していた会場は嘘のように静まり返った。試合に対する熱は一気に冷めてしまったが、文句を言う者などいようはずもない。

「黙祷！」

重い静寂の中で、MCが率先して目を閉じると、観客から闘食家まで、全てがそれに習った。明凜館高校の面々から女王沙耶子までも、そこにいる全ての人間が東日本大震災の犠牲者の冥福を心から祈っていた。

黙祷が終わると、一気に会場の雰囲気が変わり、再び熱狂のボルテージが上った。

「さあ、第3試合を始めるぞ！ 栃木代表の明凜館高校が強力なだけに、こちらの試合にも注目が集まります。福島少女達は何を見せってくれるのか！？」

試合前、食士団のリーダー村田は渋い顔をしていた。それもそのはず、地方予選では二位のチームまで闘食杯に進めるのだが、彼のチームは二位で、一位のいわき青海高校に大差で負けていたのだ。

「ふ、リベンジか、それもよからう」

村田が言つと、今度は負けぬと食士団の面々に気合が入る。

やがて試合の時間になり、いわき青海の先鋒、浜崎空が中央のテーブルの前に座った。対する青森食士団からは背は低いが体格の良い青年が出て来た。彼が目の中のテーブルに座ると、空はにと得意満面の笑みを浮かべた。すると、男は眉間に皺をよせる。実は、空は目の前の男に対して、地方予選でもまったく同じ事をしていた。

闘食のメニューは串に刺さった餡団子。これを三本一組で食べて1ポイントとなる。

試合が始まる直前、林檎は腕を組んでいわき青海の闘食を見極めようとしていた。

「あたしたちと同じ女子高生のチームとはな。どんな闘食を見せてくれるのか楽しみだ」

「地方予選では、彼女達は圧倒的な強さだったという話よ」

「そんなにすごいのか？」

「それはすぐに分かること」

そして第3試合が始まった。その直後に観客席が騒ぎ始める。その原因は、空の闘食にあった。串団子を両手に一本ずつ持って、凄まじい早さで口に運んで、素早く食べていく。お構いなしに水も飲んで、どんどん団子を流し込んでいった。

「おい、あいつ、とんでもない早さで食ってるぞ!？」

「あんな食べ方したら、お腹に負担がかかっちゃうよ」

「確かに無茶な食べ方だけれど、恐らくあれが彼女の闘食のスタイル」

鵜は驚く林檎と心配そうな小桃に向かって言った。

食士団といわき青海のポイント差が見る間に開く。空は残り六分のところで、九組二十七本の団子を食べた所で完全に止まった。

「もったべれない」

空は言いながらお腹を押さえてふんぞり返り、残りの時間は食べている相手をにやけ顔でじっと見つめていた。その時に食士団の先鋒は五組目を食べ終えたところだった。

そこまで見て林檎は空の闘食を理解した。

「なるほど、そういうことか」

「競馬で言えば先行逃げ切りタイプね。前半で大差を付けることによって、後半で相手に大きなプレッシャーを与える事が出来る」

「確かに、ああも見つめられたらやりづらいだろうな……」

食士団の先鋒は何とかして空に追いつこうと焦っていた。しかし、

焦れば焦るほど、食が思うように進まず、七組目の途中で時間切れとなった。これでいわき青海高校は9ポイント、食土団は6ポイントとなった。

続いて中堅戦は増子風美の登場である。食土団の方はサキという若い女性が出て来た。勝負品目は冷やし中華だ。

試合が始まると、サキは猛然と食べ始めた。一方、風美の方はお上品に面を嚙っていた。観客の視線は自然とサキの方に集中する。

「サキ選手、最初から飛ばしているぞ！ もう間もなく一杯目を完食だ！」

そして、テーブルの上に空になったガラスの器が置かれる。何と、それを最初に置いたのは風美の方だった。MCと観客は一瞬しんとなった。

「な、なんと！？ 風美選手の方が早く食べ終えていた！？ 何時の間にそんなに食べていたんだ！？」

「そんな馬鹿な！？」

サキが思わず食べる手を止めて叫んでいた。

風美には特に目立ったようなところはないが、二杯目では否応なしに観客に注目されたので、やがて驚くような早さで面を嚙っている事が知れた。それを見ていた林檎は、鵜と初めて会ったときの菓子パン勝負を思い出した。

「なんというか、あいつの食い方からは鵜に似たものを感じるな」

「彼女はわたしと同じタイプの闘食家よ。計算に裏打ちされた闘食をするはず」

サキは相手を出し抜こうと躍起になって食べるが、その差は縮みもいなければ開く事もない。風美は上品ながらも驚異的な速さで麺を嚙り、敵を完全に押さえ込んでいた。サキは点差があるのでどうにかしてそれを縮めようと、無理をしても食べる速さを上げていく。そして、サキは七杯の冷やし中華を食べたところで崩壊し、箸を置いて俯き、苦しそうに呻きだした。相手を意識するあまりにペースを乱し、あっという間に限界を超えてしまったのだ。冷たい麺

を一気に食べたので、お腹へのダメージも大きかった。

「そんなに慌てて食べなければ、まだまだ入ったのにね」

同じく七杯目を完食していた風美は泰然自若として、まだ時間はこつていたが、そこで食べるのを止めた。

「おっと、風美選手、ここでストップだ。時間はまだ残っているが、サキ先選手動はけない、本当に苦しそうだ！」

そのままサキは一口も食べられずに二〇分が過ぎていった。これでいわき青海高校は１６ポイント、青森食土団は１３ポイントとなり、依然として３ポイントの差があった。

そして大将戦に移る。食土団を村田は負けてなるものかと歯を食いしばった。

「地方予選の決勝では大差を付けられたが、３ポイントなら追いつけない点差ではない。後は得意の揚げ物が出ることを祈るのみ」

いわき青海高校のベンチでは、風美が海宇の背中を叩いていた。

「海宇ちゃん、後は頼んだね」

「まかせて……」

出て行く海宇の後姿を見て、空と風美はどこか悲しげな表情を浮かべていた。試合場に向かう海宇はその背中に、拭い難い暗さを背負っていた。

まだ走れる。走り続けていれば、何もかも忘れることが出来る。走るんだ、どこまでも走っていくんだ！！

海宇が内に抱く強い言葉には、呪詛に近い音律があった。

そんな海宇の姿を彩が遠くから見ていた。今試合場にいるのは彼女だけで、予選などに興味がない沙耶子と桜子は控え室に引っ込んでいた。

「あの子に何が起こったのか、わたしには分かる……」

彩は胸に何かが詰まるような思いで言った。海宇には自分と同じ敵がいる。彩にはそれがすぐに分かった。ただ、彩と海宇の間には決定的な違いがあった。

いよいよ試合が近づき、海宇を目の前にした村田は、相手の全身か

ら漂う黒い気配に圧倒されて固まった。それから海宇がテーブルの前に座るまでの動作を、村田は思わず目で追った。

なんなんだこの少女は……いかん、相手の雰囲気飲まれるな。自分の闘食することに集中しなければ。

やがてMCが言った。

「第3試合もいよいよ大詰めだ！ いわき青海高校は3ポイントの差はあるものの、まだ油断はできない！ 食士団は最後まで諦めるな！ 勝負の行方を決める料理は、わらじ豚カツだ！」

二人の闘食家の前に、通常の一・五倍はある豚カツが出て来た。

「このボリューム満点の豚カツを、華奢な体の女子高生がどこまで食べることが出来るのか、これは見ものです！」

MCが言っている側で、村田は喜色を浮かべた。

「よし、得意の揚げ物がきた、まだ希望はある」

そしてカウントダウンが始まり、試合が開始された。

村田は得意と言っただけに、大きなカツを二切れずつ食べて、かなりのペースで食べ進んだ。そして二分もしないうちに豚カツ一皿を食べ終える。だが、彼の顔から得意な笑みは消えていた。一切れずつ食べていた海宇も、村田とほぼ同時に一皿目を完食するが、村田を驚かせたのは食べる速さではなく、彼女の姿だった。可愛らしい少女が阿修羅のごとき様相で食べているのだ。しかも海宇は村田の事などまるで見ていない。目の前に別の強大な敵がいて、海宇はそれと闘っているように思われた。それを目の当たりにしている村田は、少女のあまりにも異様な闘食に慄然とさせられた。

村田は一気にペースダウンして、結局5皿目の途中で時間切れとなり、海宇の方は6皿の特豚カツを完食していた。

「5ポイントの差をつけて、いわき青海高校が準決勝に進出だーっ！ 何と！ 初出場の女子高生チームが二チーム共に準決勝へ進出しました！ これは楽しくなってきたぞ！ そして、一回戦最後の試合は、いよいよイースト・イーターズの登場だーっ！」

沙耶子と桜子は、第3試合が始まる前に姿を消し、控え室に引きこもっていた。試合が近づき、彩が控え室に駆け込むと、沙耶子は鏡に向かっていて、桜子はなにやら酷く悩んでいる様子だった。

「きたこれ、めっちゃやる気ないよ、この人たち……」

「一回戦なんて、燃えないわよね」

「燃えなくても行かなきゃだめでしょ。沙耶姉さん、お色直しして場合じゃないって」

「観客に美しい女王を見てもらいたいじゃない。まだ時間がかかりそうだから、二人で先にいってちゃっちゃと片付けてきちゃってよ」

「桜子さんは知恵熱が出そうなくらい悩んでますけど……」

「うーん、そう、そうよね。やっぱりそれで決まりよね！ 勝負あったー!!」

「うお、どうしたの桜子さん！？ やる気になった？」

「今、歴史的な勝負に決着がついたわ。ブラックスパークときび団子の戦いは、きび団子の勝ち！」

「つつつか、まだそれ悩んでたの!？」

「ブラックスパークの人気だけでは、きび団子の伝統と風格には及ばないという結論に達したわ」

「左様ですか……それって、桜子さんの好みって事でしょ。ブラックスパークの方が全然売れてるし」

「売れてるとかは問題じゃないの。この三日間、あらゆる方向からリサーチをして、駄菓子としてどちらが優れているのか検証してきたわ。きび団子は伝統と風格もさることながら、災害で保存食として活躍していたという歴史的な事実が大きかったわね」

「たった三十円の駄菓子をそこまでリサーチするとは……さすが桜子さん」

その時、沙耶子が鏡の前で異様な笑みを浮かべた。鏡越しに彼女の笑顔を見た彩はやばいと思った。沙耶子がこんな顔をするときは、決まって恐ろしい事を言い出すのだ。

「良いこと考えた。桜子の悩みも解消されたようだし、三人で記録

に挑戦しよう」

「記録って？」

「闘食杯史上、最大のポイント差は深山瑠璃のチームが叩き出した17ポイント差、それをわたしたちが塗り替えるのさ」

「まじで？ それって、相手のチームが相当えげつない事になるけど……」

「観客は喜ぶわよ」

「うーん、そこまでしてお客さんを喜ばせなきゃ駄目なの？」

彩が気乗りせずに言うと、沙耶子を見る者の背筋をぞつとさせるような獣じみた笑みを浮かべて言った。

「それがプロの仕事っていうものでしょう」

第一回戦最終試合は、茨城代表のフードアタッカーと東京代表のイースト・イーターズの戦い。闘食女王が姿を現すと、観客達は水が瞬間的に沸騰するような勢いで沸いた。人々は沙耶子に何かを期待していて、観客たちの間に次第に異様な雰囲気広がっていく。それは鵜たちにも伝わっていた。

「何か嫌な感じがするな」

「フードアタッカーの方は、戦う前から押されちゃってる感じだよ」  
「相手は完全に沙耶子の空気に飲まれているわね。誰か病院送りになるかもしれないわ」

「病院送りは流石にないだろ。限界だったらギブアップすればいいだけだ」

「精神力の弱い人が沙耶子を前にすると、それが出来なくなる」

「出来なくなっただろうちゃうの？」

「直に分るでしょう」

鵜が言うと、林檎と小桃は固唾を呑むような思いで試合を見守った。

「一回戦もこれが最後、イースト・イーターズの先鋒は、高校生最強の闘食家、楠木彩だ！！ フードアタッカーどう出てくるのか！

？」

相手方の先鋒は、彩と同年くらいの少年だった。

「可愛そうだけど、沙耶姉さんに怒られたくないから、全力でいくわ」

「な、なにを！ 可哀そうってどういう意味だ！」

「ボロ負けしても、泣いたりしちや駄目だよ」

「くそ、馬鹿にしゃがって！」

彩は憤る少年に向かって三日月のような笑いを浮かべ、その目に攻撃的な色を宿す。

「勝負の品目は、ショートケーキだ！ 二つ食べて初めて1ポイント獲得になるぞ」

試合開始五秒前になると、観客がカウントを数え始めた。

『5、4、3、2、1、READY、GO！！』

彩はショートケーキを手づかみで食べ始めた。その速さときたら凄まじく、彩の傍らにショートケーキの皿が次々と折り重なっていった。一方、相手の少年も負けじと彩に合わせて食べていたが、それが悪かった。無理が祟ってあつという間に調子を崩してしまったのだ。フードアタッカーの先鋒は、八個目のショートケーキを食べ終わった後は、青い顔で冷や汗を流し、一口も食べられなくなっていた。

「馬鹿ねえ。無理するからそういう事になっちゃうのよ」

彩は相手を虚仮こけにしてから、さらに勢を増してケーキを食べていく。皿の枚数が新記録に近づいてくると、魅入っていた観客が騒ぎ始めた。MCも観客と同様に興奮して言った。

「どこまで伸びるんだ！？ まったく衰える様子がない！ 強すぎるぞ、楠木彩！ 高校生最強の称号は伊達ではない！！」

試合開始から二〇分が経つと同時に、彩は立ち上がって二十六枚皿を両手で持って重ねた。

「そりゃ！」

うずたかく積まれた皿が小刻みに揺れる。

「何と！？ 楠木彩、二十分で二六個ものショートケーキを平らげたぞ！？ これは大会新記録だ！！」

彩は観客の興奮と声援を受ける中で、林檎の事を見て笑みを浮かべた。

「あなたを見てどや顔しているわ」

「なんかむかつくな…」

イースト・イーターズは相手チームにいきなり9ポイントの差をつけ、二番手には春園桜子が出て来た。フードアタッカーの方からは背の高い痩せた男が出てくる。桜子は席について敵を目の前にすると、テーブルの上に両手を置いて、指で卓上を叩き始めた。その妙な行動に眉を顰めている男に桜子は言った。

「あなた、闘食って何だと思う？」

「何を言っているんだ？」

「ないの？ あなたの闘食の持論とか、定義とかさ。そういうのを持たない闘食家って、雑魚しかいないんだよね」

「そんなもの、より多く食べて相手を出し抜くのが闘食だろうが！」  
「分かってないわね。闘食とはリズムよ。自分に合ったリズムを見つけて、リズムに合わせて食べるの。最も早く食べられるリズム、より多く食べられるリズム、わたしの中ではいつも闘食の音が響いている」

その時に男は、桜子の手の動きがピアノを弾く手つきだという事に気付いた。桜子は敵をそっちのけで上を見て、美しい音色に耳を傾けているような、うつとりとした表情になっている。

「ま、彩が9ポイントも先取してるし、緩やかなリズムでいくわ」

「訳の分らない事を…」

「とても大切な事なのに」

会話出来たのはそこまでで、試合が始まった。品目はミートスパゲティだ。桜子は常に踵でリズムを取りながら料理を食べていく。食べる量も早さも一定で、桜子の闘食は整然としていて見る者に美しいと思わせる。だが、それだけではない。桜子は相手が食べるリ

ズムも的確に掴んで、確実に差をつけられる速さで食べていた。敵との差はじわじわと広がり、試合終了時には相手が六皿、桜子は九皿の Pasta を食べ、イースト・イーターズはさらに3ポイント差を広げる。

「あなたたち、上出来よ」

「今12ポイント先取だから、後6ポイントの上乗せで記録達成だね。沙耶姉さんだったなら楽勝でしょ」

「6ポイントじゃ済まないわよ。奴らの心が碎けるまで叩きのめす」

沙耶子は彩に恐ろしい言葉を置いて出て行った。途端に沙耶子コールが観客席から沸き起こる。

フードアタッカーの大將はもう席についていた。見た目は二〇代後半くらいの男で、体格はいいが、頬がこけていて気難しそうな顔をしていた。彼の前の席に沙耶子が座る。同時に男は沙耶子に見据えられて、一瞬、息が止まった。沙耶子は男なら誰でも振り向くらしいの美女だが、彼女の中にはそれを忘れさせる程の獣じみた凶暴性があった。

「さあ、楽しませてちょうだい」

勝負の料理はホットドック。これは二つ食べて1ポイントとなる。点差が大きい上に、全ての観客が沙耶子を応援している。フードアタッカーの大將はもう完全に諦めていた。

一組二つのホットドッグが運ばれてくると、沙耶子は一つ目を口に入れ、次の瞬間にはホットドックの姿が口の中に消えていた。観客やMCがその凄まじい早さに驚く暇もなく、沙耶子は二つ目のホットドッグも見る間に食べてしまった。

「なんと言う早さだ！？ ホットドッグ二つを一瞬で食べたぞ！？

これは凄いを通り越して恐ろしいとさえ言える！ これが闘食女王の実力だ！！」

沙耶子は次々とホットドッグを食べていく。相手の方もこのままで終わる訳にはいかなかったので抵抗はしていた。だが、数分で沙耶子は八組のホットドッグを完食し、それに対して相手の方は三組、こ

れで17ポイントの差が付いた。

「あなた、もつと頑張らないと、大変な事になるわよ」

「どういう意味だ？」

「あなたたちはこのままだと、闘食杯史上最低のチームとして名を残す事になる」

獲物は追い詰めた。後は仕留めるだけ。沙耶子はこの状況にぞくぞくして、心の底から楽しいという笑みを浮かべる。

「よく聞きなさいよ。闘食杯で今までにあった最高得点差は17ポイントなのよ。後1ポイントでも点差が付いたその瞬間に、あなたたちには史上最低のチームの烙印が押される。そうなたらちゃんと宣伝してあげるわ。イーストフードカンパニーには、闘食関連の雑誌を出してる子会社が沢山あるから、わたしからお願ひしてあげる」

「な、何だと！？　ちくしょう、悪魔め！」

「嫌なら贖<sup>あがな</sup>いなさい！　女王に喰らい付いてみなさい！」

「くそ、やってやる、やってやる！！」

相手は必死になって食べ始めた。沙耶子はそれに合わせて食べるので、ポイント差は縮まりもしなければ開きもしない。

「コール！！」

沙耶子がそう言つて指を鳴らすと、観客席のほうから『食ーえ！』という声が聞こえてきた。食べコールが一挙に渦となつて試合場に降り注ぐ。フードアタッカーの大將は、異様な状況の中で沙耶子の狂気に晒されて、自分が何をしているのかも分からなくなつていた。彼は限界を超えても何かに取り付かれたようにホットドッグを食い続ける。まるで催眠術でも受けているかのようにだった。それを目の当たりにして鷄以外の明凜館高校の面々は、沙耶子の非常さに啞然となり、小桃と胡桃などは酷く怖がつていた。

「おい、あいつ様子がおかしいぞ」

「酷すぎる。これじゃ無理やり食べさせられてるのと同じだよ……」

「あんまりなのですね……」

「観客を利用してでも闘食を続けさせ、精神面と肉体面の両方を破壊する。これが華喰沙耶子という人間なのよ」

鵜の言葉がメンバーの耳に重く響いた。

試合開始から二〇分が近くなり、沙耶子は15組、相手の男は10組のホットドッグを食べていた。

「お、おっぐ、えあ……」

ついに男は精神も肉体も耐え切れなくなって椅子ごと真後ろに倒れた。そして激しい嘔吐を繰り返し、観客席からそれを罵る声が飛んでくる。吐いている途中で男は突然仰向けになり、身体を痙攣させて人のものとは思えない叫び声をあげて苦しみの姿を晒した。

「これはまずい！ 医療班！ 早く！」

MCが慌てて言うのと、何人かが飛んできて、倒れた男はタンカーで運ばれていく。その時にペナルティの3ポイントがイースト・イーターズに加算された。フードアタッカーの残りの二人は、あまりの状況下に呆然とした。

「まったく、無様なものね」

沙耶子は事も無げに言うと、信じられないことにホットドッグの追加を命令した。それを目の当たりにしたMCは、少し声を震わせて叫んだ。

「な、何と！！？ まだ食べるのか！！？ 徹底的に相手のチームを叩き潰すつもりだ！！ 何という冷酷さ！！ なんていうえげつなさ！！ これが闘食女王！！ これが華喰沙耶子だ！！！」

沙耶子がさらに二つのホットドッグを食べ終わったところで時間切れとなった。試合が終わると、沙耶子は立ち上がって美しい髪をかき上げた。イースト・イーターズはフードアタッカーに21ポイントの差をつけて勝利し、闘食杯史上に残る点差を叩き出したのだ。

これが華喰沙耶子だ！！！！・・・終わり

## 第九話 大丈夫だよ！

イーストフードカンパニー、東京支社のビルの最上階に、スーツ姿で髪が少し白くなっている強面の男がいた。鷺沼徹庄、イーストフードカンパニーではナンバー3の男で、チーム龍餓の後盾でもある。

「加藤、例の闘食家たちをこちら側に引き入れろ」

「承知いたしました。彼女らが受け入れない場合は如何いたしましたよう？」

「そうなたら目障りなだけだ、潰してしまえ」

鷺沼は後ろで手を組み、三三階の高さから遠方にある東京ドームを見た。

「わざわざシード扱いにしてまで引つ張り出したんだ。そうならな  
い事を祈りたいがな」

試合の翌日は休日となる。明凜館高校のメンバーはイーストフードカンパニー側で用意している東京ドーム近くの高級ホテルに宿泊していた。

午前中に鷺はホテルのロビーに呼び出された。そこで待っていたのは、スーツ姿の男性だった。顔は整っていて中々の色男で、髪は七十三に分けていて、見た目は真面目そうな会社員という様相だった。鷺はこの見知らぬ男が誰なのか、だいたい理解していた。

「スカウトでもしに来たの？」

「これはこれは、話が早くて助かりますよ。わたしは加藤雄介と申します。イーストフードカンパニーで営業兼スカウトをやっていますね」

加藤は名刺を差し出して挨拶した。鷺は憮然としてそれを受け取る。

「もう何を言いたいのかはお分かりでしょう。あなたをイーストフ

ードカンパニー所属の闘食家として迎えたのですよ。もちろんただではありません。我社に所属する闘食家が給料をもらっている事はご存知でしょう。内々の話ですが、闘食家にはSからCまでのランク付けがされていまして、ランクによって給与も仕事の内容も変わってきます。あなたならば、Aランクからの待遇が可能でしょう。月の給与は五十万以上、女子高生にとってはそれだけでも破格の値段でしょう。しかし、それはまだ序の口、Aランク以上の闘食家になると、芸能界への進出やテレビの出演などを強力にサポートいたします。タレントとして我社の闘食家が活躍しているのは、誰でも知っている事でしょう。多くの闘食家が闘食杯を目指すのは、百万などという端金欲しいからではありません。こういう理由があるのですよ。もっと分かりやすく言えば、あなたと同じ年の楠木彩の年収をご存知ですか？」

「あなたの話には、一切興味が無いわ。もう聞く気もない」

「おや、こんな良い話を断るといいますか？ 愚かですね」

「あなた達はわたしが何者なのか、もう調べ上げているはずよ。それを知っていてこんな話をする方がよほど愚かだわ」

「知っていますとも。あなたは先代の闘食女王、深山瑠璃の妹です。姉妹揃って素晴らしい資質をお持ちだ。しかし、妹の方がもう少し利口かと思いましたが、姉と同じ轍を踏むとは残念ですね。深山瑠璃が我々に逆らってどうなったのか、あなたは良くご存知のはずなのに」

「それを知っているからこそ、あなた達には屈しない。もう話す事はない」

「後悔する事になりますよ」

加藤は陰湿な蔭のある目で鵜を見下ろし、絶対的優位な者が持つ尊大な態度を持って言った。そんな加藤の目を、鵜は強い意志をと義憤を宿した目で見返す。その強烈な視線に射抜かれて、加藤はたじろいだ。鵜をこのまま放っておくのは危険かもしれない、彼はそう思わずにはいられなかった。

翌朝、刃は胡桃を探してホテルの中を歩き回っていた。そして、胡桃がホテルの一階にある喫茶店でお茶を飲んでいるのを見つけた。「いた、こんな所でお茶なんか飲んで、しかもケーキまで食べてるし……」

「モーニングケーキを欠かす事は出来ませんわ」

「胡桃ちゃん、毎朝ケーキ食べてるの……？」

「いつもなら三つは食べるところなのですが、今日は鶯さんに止められてしまいましたわ」

「そりゃ止めるよ、あと一時間もしたら試合が始まるんだから……」

胡桃を放っておくとどこかへ行ってしまうそうだったので、刃はそのまま待つてから、胡桃と一緒に東京ドームに向かった。

明凜館高校と龍餓の戦いが始まろうとしていた。ドームの観客席は朝から超満員、誰もがこの一戦に期待をしていた。試合が始まる直前に、林檎が試合のメニューを確認して眉を顰<sup>ひそ</sup>める。

「おい、この二番目の激辛マーボー丼って何だ!？」

「準決勝からは、辛味料理が投入されるわ。一般参加の殆どが、これに阻まれて負ける。結果的に闘食家を多く抱えるイーストフードカンパニーの闘食チームだけが勝ちあがる仕組みにもなっているわ」  
「そうか、鶯が小桃を是が非でもチームに入れたのは、これを知っていたからか。だったら、小桃に出てもらおう」

「わたしは、ちょっと……」

「小桃は応援担当よ。それで良いとわたしは言った」

「鶯ちゃん、ごめんね……」

「いいのよ、気にしないで」

林檎は、煮え切らない態度の小桃にいらつきながら言った。

「じゃあ、どうすんだよこれ!? あたしも胡桃も辛いものは苦手だ!」

「わたしが行くわ」

「やれるのか？」

「得意とはいい難いけれど、胡桃と林檎よりはましよ。もしここで負けるようなら、それまでだったという事よ。また出直すわ」

そして、両陣営の先鋒、エイミと胡桃が出てくると、そこかしこから爆発するように声援が起こり始める。エイミはテーブルに着くと言った。

「お互いに頑張りましょうね」

胡桃はそれにそっぽを向いて答える。

「わたくし、あなたにだけは負けたくありません」

「なんだかよく分からないけど嫌われているみたいね」

エイミが困ったような顔をして言った直後、急に胡桃の様子がおかしくなった。胡桃の顔が見る間に蒼白になり、お腹を押さえて苦しみます。何が起こったのか分からずにエイミは啞然とした。ついに胡桃は、椅子ごと横に倒れてしまう。

「ちよつとあなた！？ どうしたの！！？」

エイミが駆け寄った時、胡桃は尋常ではない苦しみ方をしていた。すぐに鷗たちも走ってくる。

「胡桃ちゃん！？ しっかりして！！」

小桃が呼びかけると、胡桃は大丈夫と言う様に微笑を浮かべるが、すぐその表情は苦悶で打ち消された。

「何だ！？ アクシデントか！？ とにかくタンカーを！」

MCが言つと胡桃はタンカーで運ばれて、すぐにやってきた救急車で近くの病院まで搬送され、準決勝は一時中断となった。

それからすぐに、龍餓のリーダーの雅樹は、加藤を控え室に呼び出した。

「加藤さん、彼女等に何をした？」

「何をしたとは、よく意味がわかりませんね」

雅樹はいきなり加藤の襟を掴んで引き上げる。加藤は苦しそうな顔で彼を見下ろした。

「そんなに俺たちが信じられないのか!!」

「よせ雅樹!!」

崔が雅樹を後ろから羽交い絞めにし、開放された加藤は言った。

「あなたたちが負けるなんて思っではいませんよ。しかし、彼女らは一筋縄にはいかない相手だった。余計な浪費をせずに済むのなら、それに越した事はないでしょう」

「貴様らはいつもそうだ！俺たちの気持ちなどおかまいなしに、自分たちに都合のいいように事を進める！いい加減うんざりしてくるぜ!!」

「あなた方にはイースト・イーターズに勝って、若社長の鼻を明かしてもらいましょう。鷺沼常務はそれを望んでいます」

「権力抗争など、社内だけでやってくれ！」

「忘れては困りますね。悪い言い方をすれば、あなた方は会社の駒なのです。もちろんわたしもね」

そんな激しいやり取りをしている横で、エイミは鏡を見て髪型を整えたり香水を付けたりしていた。それを見かねた崔が言った。

「君はこんな時に何をしているんだ？」

「すぐに試合が始まるもの、お色直ししておかないとね」

「それはどういう意味だ？」

「きつと、わたしたちにとって、とても楽しい事になるわ」

エイミは鏡を見ながら柔らかに笑った。崔にも雅樹にもさっぱり意味が分からなかった。

胡桃は病院で薬の投与を受けて大分落ち着いたが、とても試合に出られる状態ではなかった。

明凜館高校のメンバーは胡桃が寝ている病室に集まり、途方に暮れていた。

「胡桃はどうしちゃったって言うんだ。何か悪いものでも食べたのか？」

「朝にお茶を飲みながらケーキを食べていただけだよ」

刃が言うと、椅子に座っていた鵜は、膝の上でぎゅっと両手を握った。

「わたしの責任だわ。もつと気をつけるべきだった……」

「鵜、それはどういう意味だ？」

「胡桃は朝のお茶かケーキのどちらかに、盛られたのよ」

「毒を盛られたとも言うのか！！？　まさか、何でそんな事されなきゃならないんだ！！？」

「昨日、イーストフードカンパニーのスカウトが来たの。話など聞かずに追い返したわ。そいつは去り際に、後悔することになると言っていた。敵対するのならば、わたしたちは奴らにとって厄介な存在でしかない。こんな事態を想定する事だっ て出来たのに……」

「本当なの？　胡桃ちゃん は本当にそんな酷い事されたの？」

小桃が信じられないという様子で言うと、鵜は確信を持って頷く。  
「間違いないわ。闘食杯に関わる施設は、全て奴らの息がかかっている。これくらい の事なら簡単に出来る」

「だったら、警察に訴えようよ！！　こんなの酷すぎるよ！！」

「そんな事をして も無駄よ。証拠なんてとつくに消されてる」

「試合はどうなるんだ？」

「胡桃は試合が始まる前に倒れたから、まだ負けてはいないわ。ただし、中断してから一時間以内に戻らなければ、わたしたちは不戦敗になる」

「そしたら、後十五分しか時間がないよ」

刃が腕時計を見ながら言った。すると林檎が怒りのあまり部屋の壁面に思い切り拳を叩きつけた。

「ちきしょう、ふざけてる！！！！　このままじゃ引き下がれない！！　あいつ等をぶちのめすには、闘食杯で勝つしかない！！　頼む小桃、あたしたちと一緒に試合に出てくれ、いま頼れるのはお前しかいないんだ！」

「わたしは……」

小桃はこの状況でも迷っていた。悲しい涙を流す母親の姿が、彼

女の後ろ髪を引いていた。その時、胡桃が目を覚まして小桃に向かって手を伸ばす。小桃は胡桃の手を包み込むようにして両手で握った。胡桃は搾り出すような苦しみの色が濃い声で言った。

「わたくしは小桃さんが闘食を嫌う理由をよく知っています。それでもお願いです。鷗さんに力を貸してあげて下さい。今だけで、この一度だけでいいのです。胡桃のお友達としてのお願いですわ」

「胡桃ちゃん……」

「わたくし、こんな目に合って鷗さんの気持ちが少しだけ分かりました。わたくしたちは、負けてはいけない…そんな気がします…ですから……」

胡桃の瞳から涙が零れ落ちた。その瞬間に小桃の義憤が迷いを打ち碎いた。小桃は胡桃の手を握って言った。

「大丈夫だよ！ わたしが胡桃ちゃんの代わりに出るから！」

胡桃は安心した微笑を浮かべ、鷗と林檎の表情にも光が差したように明るさが戻った。

「よし、胡桃ちゃんは僕が見ているから、みんなは早く行って！」  
刃が言くと、鷗たちは頷いて病室から走って出ていった。

東京ドーム内では観客たちの間からどよめきが起こっていた。間もなく時間切れになるところだ。MCは神経質になって足を踏み鳴らしていた。そこへ鷗たちが入ってくる。

「おお！？ 戻ってきたぞ、明凜館高校！！ これで試合続行だ！！」

MCの声を皮切りに、観客席から声援の雨が降る。その中で鷗は言った。

「二番手は小桃で確定よ」

「後はどうする？」

林檎が言くと、鷗は少し考えてから答えた。

「わたしが最初に出るわ。大将戦は林檎に任せる」

「本当にそれで良いのかい？」

「それで良いというよりも、それしかわたし達が勝つ方法はないわ。龍田雅樹はバランス型では最強の闘食家、同じタイプのわたしでは勝てない。だから彼とはまったく違うタイプの林檎をぶつけるのよ。勝機を見出すとしたら、それしかないわ」

それから鵜は試合場に向かう前に言った。

「シヨックを受けないように最初に言っておくけど、わたしは負けるわ」

「おいおい、いきなり敗北宣言か」

「でも、希望は繋ぐ。後は仲間の力を信じる」

ずっと前から待っていたエイミの前に鵜がやってくる。

「言い訳をするつもりはないけれど、内の者が余計な事をしたみたいね」

「借りはこの闘食で返すわ」

時間一杯になり、MCの声が響く。

「明凜館高校は、初戦で大将を務めた深山鵜を出してきた！ 対するは甘味最強の闘食家、エイミ・リファール！ 試合のメニューは杏仁豆腐だ！！」

二人の闘食家の前に出て来たガラスの容器に入った杏仁豆腐は、よく見る角切りのものではなく、豆腐に似た正方形の白い塊で、その味もプリンのように濃厚な本格的なものだった。これを二つ食べて1ポイントとなる。

「甘味勝負で、わたしにどこまで対抗できるかしら、楽しみだわ」

「わたしたちは負けない」

そして観客席からカウントダウンの声が上った。

『5、4、3、2、1、REDDY、GO！！』

鵜は素早く杏仁豆腐の容器を取り、スプーンを逆手に持ち替える。何をするのかと思えば、柄の部分で杏仁豆腐を縦長に三等分にして、それらを立て続けに口に運んで丸の飲みにした。鵜はあっという間に一つを食べ終えると、エイミは感心して言った。

「あなたの闘食の技術には驚かされるわ。でも、負けないわよ！」

エイミの食べ方には別段変わったところはないが、それでいて恐ろしく早かった。すぐに鵜がエイミについていくような形になった。二人は次々に杏仁豆腐を食べていき、テーブルにあれよという間に空の容器が積み重なっていく。

「これは凄い戦いだぞ！？ 甘味でエイミにここまで対抗する闘食家は、わたしは華喰沙耶子以外には知らない！ こんな闘食家が栃木にいたとは！？」

MCが声をあげると、エイミ一辺倒だった応援が、鵜に傾いてきた。間もなく会場はエイミと鵜への声援が拮抗して勝負もヒートアップしてくる。

勝負開始から十分が過ぎると、エイミが杏仁豆腐一個分の差をつけていた。その時になって、エイミはスプーンを手の内できると回して、杏仁豆腐の上に突き立てる。

「これからが甘味の女神の本領発揮よ！」

「まだ本気ではなかったと言うの」

「ついてくる事が出来たら、貴方は本物だわ」

「これ以上の点差は与えない」

さらにエイミのペースが速くなり、つぐみもそれに合わせる。戦いは決勝戦と言ってもいくらいに激しさを増していった。しかし、試合が終わりに近づくに連れて、鵜のペースが少しずつ落ちてくる。鵜の実力を信じていた小桃と林檎は少なからず衝撃を受けた。

「鵜ちゃん、ちょっと苦しそうだよ」

「エイミの方は顔色一つかえてない。何て奴だ……」

「あ、1ポイント差がついた！？」

「残り3分か。ペースダウンしたら、一気にもっていかれる」

これ以降は点差が開いていくかと思われたが、鵜は決死の覚悟で喰らい付いた。いつも寡黙で表情を変えない彼女が、最後はかなり苦しそうな顔をしていた。そして試合終了を知らせるブザーが鳴る。  
「試合終了　っ！！」

MCが言うと同時に、戦っていた二人はスプーンを置いた。すま

し顔のエイミに対して、鵜は肩で息をしていた。

「ここまでついて来るなんて、正直驚いたわ」

エイミが食べた杏仁豆腐の数は32、対する鵜は28、ポイントになると現時点で龍餓が16ポイント、明凜館高校が14ポイントとなる。

「2ポイントの差はついたものの、甘味最強のエイミを相手に、深山鵜よく健闘したぞ！ 初戦から素晴らしい試合だ！」

鵜は林檎と小桃のところに戻ってくると、申し訳なさそうに下を向いた。

「ごめんなさい、2ポイントも差をつけられてしまったわ」

「何言ってる。あんなとんでもない奴相手に、よくやった」

「次はわたしの番だね」

「頼んだぞ、小桃！」

小桃が液晶スクリーンに映し出され、観客席はひそひそと話し合うような声がそこかしこから起こる。誰一人としてその少女の名も姿も知らなかった。一方、龍餓の崔諭烏飛ちえゆうひが出てくると、人々の声は歓声に変わった。

その時にスカウトの加藤雄介が、雅樹のところに来ていた。彼は雅樹の横で小桃の姿を見てあざ笑った。

「苦し紛れに数合わせのお飾りを出してきましたか。ほんの少しでも点を稼ごうという魂胆なのでしょうが、闘食杯の辛味料理はそんなに甘くはない」

雅樹が煙たそうに加藤の姿を見ると、その横で鼻歌を歌っているエイミの姿が目につく。

「エイミ、何がそんなに楽しいんだ？」

「さあ、何かしらね」

両雄が向かい合って席に着くと、観客席の興奮が一層高まる。崔は目の前の少女を観察していた。

前の試合では後ろで応援していた少女か。

その時、小桃はテーブルの上を両手の指で叩き始めた。それを見

た崔は、最初は怪訝な目をしていたが、すぐに背中から脳天まで怖気が走るような感覚に見舞われた。

これは春園桜子と同じ仕草……！？

崔の脳裏に桜子に惨敗させられた苦い記憶が蘇る。この行動は、桜子が闘食のリズムを掴むと称して必ず最初にやる事だった。観客の多くもそれを知っていた為、辺りは急に騒然となった。

「明凜館高校から、謎の少女、春園小桃の登場だ！ 彼女の實力はまったくの未知数、激辛料理を前にして、韓国最強と謳われた崔諭烏飛にどこまで対抗できるのだろうか……！」

春園小桃、春園だと！？ この子は桜子と関係があるのか！？

そして試合が始まる。崔は蟠りを胸に蓄えたまま小桃との試合に突入する事になった。

試合の品目は激辛マーボー丼、真つ赤なマーボーのかかった丼を、二人は同時に持ち上げて食べ始めた。小桃は食べている間も踵で床を打ってリズムを取っていた。

崔は初手から小桃の闘食に驚かされた。

何だこの子は！？ わたしの事をまったく意識していない、

これで闘食になるのか？

闘食とは読んで字のごとく、食で闘うという事だ。闘う以上は、相手を意識するのは当たり前だが、小桃はまったくそれを度外視していた。普通なら素人と言う所だが、崔は尋常でないものを小桃から感じていた。

「ご馳走様、次！」

小桃が空の丼を置いた時、まったく予想していなかった状況に、観客席もMCも静まり返る。小桃が二杯目を食べ始めた時、一杯目を食べていた崔の丼の中身はまだ少しだけ残っていた。その時になつて、ようやくMCが息を吹き返して言った。

「な、なんだこれは！？ どうなっているんだ！？ 春園小桃がいきなり先手を取ったぞ！？ この激辛マーボー丼を前にしてまったく怯まないどころか、崔の先をいつている……！ 予想外すぎる展開

だ！！！」

そして観客席から熱い声援が轟く。その殆どが小桃に向けられていた。

これはいかん！？ 全力を出さなければ負ける！！

小桃の実力を理解した崔は、食べるスピードを限界まで上げた。観客の大声も、崔の焦りも、小桃には伝わらない。彼女はただ食べる事だけに集中している。

わたしは最高のリズムで食べるだけ。二十分で一番早く、沢山食べられるリズム……うん、もっともっと早くてもいいな。

小桃の足踏みが早くなり、それに合わせて食べる早さも増した。そして、空になった二つ目の井を小桃は静かに置いた。

「次！」

崔との差がまた少し開いた。

桜子と彩は、その試合の様子を少し離れたところから見ていた。

「桜子さんの妹、すげえ……」

「あの子は沙耶子に似ているわ」

「え？ どの辺りがあの凶悪な沙耶姉さんに似ていると……？」

「もちろん、性格も闘食の性質もまったく違うわ。ただ、闘食家として天性の才能を持っているところは同じよ」

「確かに、小桃は普通じゃない感じがするよ」

「鷺沼のじじいも、余計な事をしてくれたわよね」

桜子はそう言いつつも、嬉しそうな顔をしていた。

そして試合開始から十分が過ぎた時、観客からわつと声があがった。崔と小桃が同時に空の井を置き、掲示板に映し出された数字は5対4だった。小桃がちょうど一杯分の差をつけていた。焦りを隠せない崔はハンカチでしきりに顔の汗を拭っていた。彼は辛いものには慣れっこだが、小桃から受けるプレッシャーが半端ではなかった。

小桃の闘食に驚いたのは敵ばかりではない。

「あいつ、相手の事をまったく見ないで食ってるぞ」

「闘食のセオリーをまったく無視しているわね。小桃はただ、目の前にある食べ物に全力を傾けているわ。夢想食いとも言ったところかしら」

「本当に周りを意識せずに全力を出せるとしたら、相手は精神的に相当きついはずだ」

小桃と崔の差はさらに広がっていた。いつも通りのほわんとした表情の小桃に対し、崔の顔が苦しげに歪んでいた。

そして二〇分が経ち、試合が終了する。小桃にとってはあっという間に過ぎた時間だったが、崔にとっては途轍もなく長い時間となった。

「あれ？ もう終わりなの？」

小桃がふと目の前の崔を見ると、彼は悪戦苦闘の末に疲労困憊の様子で、眼鏡を取って顔に吹き出た汗を拭っていた。そして、崔のテーブルには七杯分の井が、小桃のテーブルには九杯分の井が積まれていた。崔は理解を越えた闘食の前に惨敗し、小桃は鵜が失った2ポイントを見事に取り返していた。

MCと観客が大騒ぎする中で、エイミは微笑を浮かべて言った。

「何であの子が後ろで応援していたのか、ずっと疑問だったのよね」

「エイミはあの子の力を知っていたんだな」

「一目見た時から、すごい子だと思っていたわ。それは兎も角として、次の試合、頑張ってね。本気出さないと、わたしたち負けちゃうわ」

「ああ、全力で行くさ。久々に燃えてきたよ」

そう言う雅樹の近くで、加藤は呆然としていた。

「そんな…馬鹿な……」

「加藤さん、今はあんたに感謝しているよ。彼女達をベストメンバにしてくれたんだからな」

雅樹は加藤を皮肉ってから出て行った。崔は雅樹が来ると、敗北に耐えないという渋い顔をして言った。

「すまん、雅樹」

「気にするな、後は俺に任せろ」

小桃が戻ると、林檎はそれに抱きついた。

「すごいよ小桃！！ 2ポイント取り返しやがった！！」

「ありがとう、あなたのお蔭で希望が見えてきた」

鵜が言つと、気恥ずかしそうな顔をした。

「よかった、みんなの役に立てて嬉しいな」

「後は林檎に任せろ」

「おう、安心しろよ鵜、必ず女王様のところまで連れてってやる！」  
大將戦が近づくと、林檎が出てきて雅樹の前に腰を下ろした。その時に林檎の発する覇気が、雅樹に痺れるように伝わる。

この子は、既に一流の闘食家としての空気を持っている。何でこんな子が地方に引ッ込んでいたのか……。

観客席は準決勝で最高潮の盛り上がりを見せる。龍餓のリーダーである雅樹は、美丈夫なので女性を中心として絶大な人気を誇っていた。だが、林檎への声援も少なくはない。優勝候補の龍餓に迫る無名の少女達のインパクトは、多くの観客を魅了しつつあった。

林檎は雅樹に向かって言った。

「あんた強いらしいな。まあ、相手が誰であろうと関係ない、あたしは自分にとって最高の闘食をするだけだ」

「それは楽しみだ。君の闘食をじっくりと見せてもらおうよ」

対戦メニューのカツ丼が、二人の前に運ばれる。そしてカウントダウンに入った。辺りに緊張が走る。

『5、4、3、2、1、REDY、GO！！』

試合が始まると同時に、林檎は猛烈な勢いで食べ始めた。

「そんなペースで食べていたら、あっという間に調子を崩してしまっぞ」

「うるさい、これがあたしの闘食だ！」

林檎は雅樹の言う事など聞こうともしない。雅樹は明らかな林檎の暴食に眉をひそめた。

「まあ、君が勝手に潰れてくれるのなら、こちらは有りがたい」

雅樹は堅実に自分のペースを守って食べ続けた。彼が得意とするのは長期戦だが、それでもかなりの速さだ。

林檎は十分そこで、カツ丼七杯完食という驚異的は速さをみせるが、そこでテーブルの上に突っ伏して動かなくなってしまった。  
「うう……」

「言わんこつちゃない。この勝負はもう見えた」

雅樹が四杯目に突入する。林檎はまったく動けない。肩で息をしている様子からも異常が伺えた。

「どうしたの林檎ちゃん！？　しっかりして！」

「まずいわ……」

鵜と小桃に成す術はない。鵜には林檎がこのまま終わるとは到底思えなかった。見守っていると、時間が過ぎていくことに、肩で息をしていた林檎の様子が次第に落ち着いていく事に気付いた。

「林檎は何かするつもりよ」

「本当に？」

鵜が小桃に頷く。時間は残り五分となり、雅樹は七杯目のカツ丼を完食し、八杯目に移ろうとした。無名の少女たちの健闘もここまですでかと、観客達が落胆したその時、林檎が目前のカツ丼を取り上げて跳ねるように起き上がった。

「追いついてきたな。ここからが本当の勝負だ！」

「まさか！？　君は暴食で明らかにダメージを受けていたはずだ！？」

「確かに少し苦しかったけどな、もう平気さ。あたしの胃袋は、消化するのが早いんだ！」

林檎が雅樹と同時にカツ丼を食べ始めると、萎んでいた歓声が活気付く。

「限界まで飛ばす！！」

「くっ、仕方がない！」

雅樹は必然的に苦手な早食いを強いられる事になった。しかしここはプロの意地を見せる。林檎と雅樹はまったく同じ速さでカツ丼

を平らげていく。5分間、二人の限界を超える闘食が繰り広げられた。試合終了直前で、二人は同時に十杯目に突入する。そして、試合終了を知らせるブザーが鳴った。

「おおっと、二人が食べているカツ丼の数は同じだ！ では、九杯目の残りを確認していきましょう」

MCが二人の前にある丼の中身を見ていく。

「ううむ、林檎選手の方がカツを一切れ多く食べているが、雅樹選手の方は飯の方をより多く食べているように見えます。これは計量の必要がありそうです」

二つの電子計量器がテーブルに置かれ、それに二つの丼が同時に乗せられた。計量器の数字がめまぐるしく変わる、緊張の一瞬だった。二つの計量器はほぼ同時に数値を示した。それを見たMCは目を大きく見開いた。

「あ、ああ！？ あああつと！！？ これはなんという事だ！！？ 紅野林檎の丼の方が、わずか5グラム少ない！！？ という事は、明凜館高校、決勝進出だーっ！！ これはとんでもない番狂わせだぞ！！」

「イエス！！」

林檎がガッツポーズをすると、観客席は大盛り上がり、小桃は喜びのあまり鶯に抱きついた。同時に雅樹が立ち上がり、林檎に手を差し出す。

「完敗だよ。いい勝負だったな」

「今回は、あたしたちの運がよかったんだ」

二人が清々しく握手を交わすと、歓声はさらに大きくなった。それを観客席の方から見ていた彩は言った。

「あいつ、インフィニティ・イーターに勝ったよ」

「決勝が楽しみになってきたわね」

桜子が言うと、彩は怖い顔をしてそれを見つめた。

「まだ準決勝があるよ」

「わたしたちが負けるとでも？」

「福島から来たあの子達は、死ぬ気で食らいついてくる。油断したら、わたしたちでも負ける！」

彩は軽はずみな桜子に対して本気で怒っていた。彩の真剣な姿は、桜子に次の試合で何かが起こると予感させた。

大丈夫だよ！・・・終わり

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6004w/>

---

グルメイ

2011年10月10日03時26分発行